

床呂郁哉（編）

トランスカルチャー状況下における

顔・身体学の構築（第二回）



科学研究費助成事業「新学術領域研究（研究領域提案型）」

『トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築—多文化をつなぐ顔と身体表現—』

公開シンポジウム（2017年12月2日）

科学研究費助成事業「新学術領域研究（研究領域提案型）」

『トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築―多文化をつなぐ顔と身体表現―』

二〇一七年度 公開シンポジウム

床呂郁哉編

トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築（第二回）

日時 二〇一七年二月二日（土） 一四時～一八時

場所 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）

三階大会議室（三〇三号室）

科学研究費助成事業「新学術領域研究（研究領域提案型）」

『トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築―多文化をつなぐ顔と身体表現―』

二〇一七年度 公開シンポジウム

司会 床呂 郁哉（A A 研）

I 趣旨説明 床呂 郁哉（A A 研）

II 報告

「多文化をつなぐ顔と身体表現」

山口 真美（中央大学文学部）

「潜在的な顔身体コミュニケーションと個人差」

渡邊 克巳（早稲田大学理工学術院）

「統・顔と身体表現の多文化比較フィールド実験研究」

高橋 康介（中京大学心理学部）

島田 将喜（帝京科学大学生命環境学部）

大石 高典（東京外国語大学現代アフリカ地域研究センター）

錢 琨（九州大学持続可能な社会のための決断科学センター）

「身体表現にみる眼差しのダイナミクス―障害をめぐる文化的差異に着目して」

田中 みわ子（東日本国際大学健康福祉学部）

「顔身体の現象学―概要と展望」

小手川 正二郎（國學院大学文学部）

國領 佳樹（立教大学文学部）

Ⅲ 総合討議

顔・身体学とは

I 趣旨説明

床呂 郁哉（AA研）

皆さま、こんにちは。予定の時刻になりましたので、本日のシンポジウム「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築」の第二回公開シンポジウムを開催させていただきますと思います。

私は本日の司会進行を務めさせていただきます、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の床呂と申します。どうかよろしくお願い致します。

本日は本当にお忙しいところを大変多くの方にご来場いただきまして、本当にありがとうございます。こちらの誤算で大変うれしい悲鳴なのですが、予定の想定人数を超えて、急遽、補助の椅子を係の者が運び込んでいますが、大変盛況となって改めてありがとうございます。

本日、プログラムに沿って進行させていただきますが、内容に入る前に、幾つか事務的な事項に関してアナウンスをさせていただきますと思います。

一つ目が、入り口に受付がありますが、受付で登録をお済みでない方は休憩時間などを利用されて、入り口で登録受付をお願いします。その際に、シンポジウム終了後の懇親会への出欠等も併せてお知らせいただければと思います。

それから二点目ですが、本日のシンポジウムは第二回と銘打っていますように、実は昨年にも全く同じタイトルで開催させていただきました。そのときに受付にも昨年の分の予備の冊子を配らせていただきましたが、今回もこういう形で簡単な冊子の作成を想定しています。

その関係で内容に関しては、前の方でちょっと録音をさせていただいておりますので、あらかじめご了承くださいければと思います。

それから同じく冊子の関係で、会場で写真撮影もさせていただいておりますので、シンポジウムの最中に担当の者が写真を撮ってしまいますが、何とぞご了承くださいければと思います。何かの事情でどうしても顔が写るのがご都合が悪いという方がもしいらっしゃいましたら、後で言っていたければと思います。

それから、会場の後ろの方にポスターが何枚か貼つてあると思います。これは特に本日から一般参加されている方には、一体何だと思われた方もいらっしゃるかもしれませんが、実は昨日、この同じ会場で、科研・新学術領域の「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築」の第一回の領域会議を開催させていただきました、そのときのポスター発表のポスターが、全部ではないのですが、幾つか残っています。ですので、特に本日からご参加の方におかれましては、休憩時間等を利用して、ぜひポスターなどをご覧になっていただければと思います。この会場の後ろと、少し出たところにも何枚かあります。それから、ポスターの所有者の方におかれては、本日のシンポジウム終了時にはポスターをはがしてお持ち帰りいただければと思います。

事務的な報告・アナウンスは以上になりますので、早速ですが、私から簡単に今回の趣旨説明に入らせていただければと思います。

(以下スライド併用)

#1

今回のシンポジウムは、基本的には科研・新学術領域「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築」の成果公開、アウトリーチ活動の一環であるということを基本的な目的

2

それに対して、その後、仮にこうした基本六表情というのがユニバーサル、普遍的としても、それをどう表出していくのかというのは異なるのではないかという疑問が定義されたり、あるいは人類学の文脈で有名な事例を幾つか言いますと、例えばお葬式です。葬儀においてどういう感情表現をするべきかという規範に関しては、さまざまな国や地域、文化圏による差があります。

日本のお隣の韓国では「泣き女」というような非常に激しい感情表現というのが規範としてあります。そうした地域もあれば、極端にはバリ島における葬式、葬儀においては、場合によっては喜ばしい表情が期待される場合が、全部ではありませんがあります。これはバリのヒンドゥー文化の文脈において、死というのは消滅ではなくて、生まれ変わりの一つのステップであるというような世界観と結び付いているわけです。

また、心理学の領域では、基本六表情の共通性にも、さまざまな形で疑問が出されるというような多様な動きがあります。

また、人類学に戻りますと、例えばミッシェル・ロザルドという有名なアメリカの人類学者はフィリピンのイロンゴットと呼ばれる山地民の社会における *liget* (怒り etc.) という感情が、必ずしも上に挙げたような欧米的なといいますか、怒りや悲しみというような分類にうまく一対一には収まらないというような話もしています。

#4

顔や表情に関しては恐らく、この後、心理学系の報告者、発表者の方から詳しいお話があるかと思いますが、ここでは少しだけ身体表現の話を付け加えます。身体表現をめぐってもさまざまな文化差があるということがしばしば指摘されています。

今、二枚、絵画の画像を出しました。左側はヨーロッパのルーベンスの裸体画です。右側

も裸体画ですが、これは日本の歌麿の浮世絵の表現です。見ていただいてお気付きかと思いますが、美術史の領域でしばしば指摘される特徴として、もちろん例外はありますが、西欧ではどちらかというと身体の物質的な存在感や立体感、言ってみれば身体のマテリアリティが強調される傾向があります。

これに対して、例外はありますが日本においては、大ざっぱにざっくりと言えば、どちらかというとむしろ身体存在感を消去していきます。立体性というよりは平面性が強調されます。これは『顔の文化誌』を書かれた有名な顔の文化史研究の村澤先生の言葉を使うと、「顔隠しの文化」というような特徴を日本の身体表現等について指摘されています。

これはさまざまな領域で、例えば服飾文化、衣服の問題に関しても、西洋のドレスなどと比較した場合、日本の着物というのはできるだけ身体凹凸をむしろ消去する方向性の衣服であるということ指摘されることもあります。もつと言うと、こうした特徴が現代日本における、例えばサブカルチャーにおける身体表現等にも共通しているのではないかということが指摘されることもあります。

例えばアニメにおける身体表現において、しばしば「フラット性」ということが指摘されます。それから、今、画面にアニメキャラのような形で映っています。初音ミクは皆さんご存じでしょうか。若い方は多分皆さんご存じかと思いますが、いわゆるボーカロイドです。あるいはアイドルユニットでPerfumeというグループがいます。彼女たちもそうですが、生身の人間の声や身体を、コンピュータを使って加工することによって、どちらかというと二次元性といえますか、アニメキャラ的な特徴を持たせていくということで、三次元の二次元化ということで、「二・五次元」と言われています。

トランスカルチャー状況 身体表現をめぐる文化差



- P.ルーベンスの裸体画と日本の浮世絵の身体表現(『入浴美人図』喜多川歌麿)
- 西欧では身体物質的な存在感・立体感、身体のマテリアリティの強調
- 日本における身体存在感の消去、平面性、「顔隠しの文化」(村澤) 西洋のドレスと日本の着物
- 現代日本まで?
- アニメの「フラット」性、初音ミク(ボカロ)やパフューム・生身の人間(3次元)の2次元化(アニメ的キャラ)化:「2.5次元」

#5

今はヨーロッパと日本の違いのようなことを言ったのですが、一方では文化的な差異をま
さにつなぐというか、越えていくような状況、「身体表現の越境と混淆」というような状況
も半面としてはあります。

また浮世絵を出しました。右側は実はゴッホの絵ですが、これはご存じの方も多いと思い
ますが、一九世紀後半以降、明治維新以降に浮世絵が大量にヨーロッパに輸出されること
を通じて、印象派をはじめとする、あるいはゴッホらを含むヨーロッパのさまざまな絵画にお
ける身体表現に影響を与えたということが言われています。

今、ちょうど上野の二つの美術館でいわゆるジャポニズム展、浮世絵の西洋絵画への影響
に關しての展覧会が二つ開催されています。私も実は数日前に観に行っただけですが、非
常に興味深いので、もし機会があれば皆さんも行かれてみてはと思います。

#6

これは過去の話ですが、現在の文脈では、例えば私はもとと東南アジアのイスラーム圏
の研究をしているのですが、日本初のいわゆる「Kawaii文化」あるいは「萌え」というよ
うな先ほどのアニメ的な文化と、イスラーム的な価値観やアイデンティティが混淆している
というような状況などにも気付くわけです。

例えば左の画像ですが、これはマレーシアにおけるイスラーム教徒のティーンエージャー
の女の子に対してどういう化粧の仕方であれば許容されるか、あるいはどういうセルフイー
の画像であればFacebookに上げていいかということを指南する、指南書の類です。

右側はインドネシアなのですが、イスラーム教徒の女の子がコスプレをしています。これは
実は何のコスプレかというと、先ほどの初音ミクのコスプレをしています。こういう形のさ

#6



さまざまな身体表現の越境ということも起きているということです。

#7

これ以外にもさまざまな多様な問題、例えば顔や身体加工・変化（へんげ）・装飾・化粧というような問題も人類学的には顔身体学のテーマに含み込まれています。人類学者レヴィ・ストロースに言わせると、「自然と対立する文化」。あるいは化粧というのはヨーロッパ系の言語で「コスメティクス」といいますが、これは起源としては「宇宙（コスモス）」を語源としています。化粧という行為は宇宙と身体との照応関係、コレスポンデンスに基づく呪術的行為であるということがしばしば指摘されます。

#8

以上挙げてきましたのはほんの一例でして、これ以外にも顔や身体学という、この新たな領域の中で扱い得るトピック、もしくは含み込まれてくる問題点というのは、他にも非常に多くのものがあるかと思っています。こうした問題意識を踏まえまして、本日のプログラムでは、私のすぐ後に山口先生から全体に関するご説明もあらうかと思いますが、心理学系のご発表・ご講演、それから、心理学と人類学のコラボレーション的なご研究に関するご発表、それから田中みわ子さんは障害学、デイスアビリティスタディーズという立場からのお話、あるいは最後に、哲学・現象学の視点からの顔や身体に対するアプローチというような、まさにディシプリンもアプローチも非常に多様な中から、顔と身体に関する総合的なお話を伺って、デイスカッションを最後にしていくという流れを予定しております。

#9

大変雑駁ですが、私からの最初の説明は以上で終わらせていただきまして、プログラムに従いまして、早速ですが、領域代表でもあります中央大学文学部の山口真美先生からお話を頂ければと思います。用意をよろしくお願いします。

Ⅱ 報告

「多文化をつなぐ顔と身体表現」

山口 真美（中央大学文学部）

中央大学の山口と申します。本日は「顔・身体学」「多文化をつなぐ顔と身体表現」についてお話しさせていただきます。

#2

今、床呂先生よりお話がありましたとおり、実は私どもは床呂先生たち、A A研の方々は、この三年間、去年と一昨年と一緒にシンポジウムをさせていただきました。一昨年は「顔と身体表現に基づく異文化理解」ということで、そして去年、ちょうど一年前の一二月九日に、今回申請が通りました「トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築」というテーマで、文化人類学、心理学、そして哲学とで新しい領域が立ち上げられないか、シンポジウムを行いました。

その結果、無事、この七月より新学術領域「顔・身体学」を構築することができまして、本日はシンポジウムとしては第二回で、新学術領域「顔・身体学」としては初の公開シンポジウムということで、本領域の説明、ならびに私のやってみました研究についてご報告させていただければと思います。

まずはこの場をセッティングしていただきましたA A研の皆さま、あと会場の皆さま、お

Ⅱ 報告

#2

(*)
FACE & BODY

科学技術振興機構「新学術領域研究（学際統合研究型）」平成23～25年度
トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築
— 多文化をつなぐ顔と身体表現 —

顔・身体学
IN TRANSCULTURAL CONTEXTS
FACE & BODY STUDY

自分の顔が好きですか？

山口真美

<http://kao-shintai.jp/>

II 報告

集まりいただきありがとうございます。今日これほどたくさんの方が来られていて、昨日、私の領域会議に出られた方と昨年いらつしやって下さった方とたくさん混ざっていらつしやるので、どの辺の話からしようかなというのを悩みます。一部重なっているところがあつたら失礼しますが、お話しさせていただきます。

もう一つ、ちょっと宣伝なのですが、この領域で「顔身体学カフェ」というものを河野先生が主導されてやっております。第一回が二月二三日です。後ほどまたお話しさせていただきますが、こういう一方的な講演ではなくて、みんなでいろいろなことを話してみようというものになりますので、ぜひご興味のある方はお申し込みいただけると幸いです。

#3

宣伝が続いてしまつて恐縮ですが、私ども新学術領域「顔・身体学」は、皆さま研究者だけではなく、一般の顔に興味がある方々、また、顔を何らかのお仕事の中で使われる方々と一緒に問題意識を共有し合つていきたいと思つています。公開シンポジウム、あるいは顔身体カフェの連絡が届くお知らせ配信メール登録フォームがありますので、領域のホームページから気軽に登録していただけますと、いろいろな情報が皆さまの元に届くかと思ひますので、よろしければぜひ登録をお願いします。

#4

それではまず、本領域が一体どんなものなのかについて、お話しさせていただきます。まずは、このシンポジウムを設定しているこの領域が一体どういうものなのか、トランスカルチャーというのは一体何なのか、新しい言葉でよく分からないかと思うのですが、トランスカルチャー状況下と身体学について、少しだけ最初に説明させていただきます。

#3

<http://kao-shintai.jp/announce-entry/>

科学研究所助成事業「新学術領域研究（研究領域構築事業）」
トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築
— 多文化をつなぐ顔と身体表現 —

顔・身体学 お知らせ配信メール登録フォーム

- ※ 顔・身体学のウェブサイト運営として、イベントのご案内、研究成果の報告などの3DSメール配信いたします。
- ※ 配信希望の方は、以下のフォームより、必要事項を入力の上、送信してください。

メールアドレス		(再入力)
氏名		
所属		

【お知らせメール配信の登録解除について】



皆さん、日本社会で生きていく中で、昨今いろいろな変化が見られているかと思いますが。一つは最近、東京オリンピックを控えて、たくさんの方の外国観光客が日本に來られて、身の回りでたくさん見ることが多いかと思ひます。ところが、いろいろな制約があります。入れ墨があると温泉に入れないなど、いろいろなちよつとした軋轢があつたりします。

一方でまた、最近ではFacebookなどSNSでさまざまな文化の人たちの顔をセルフイーで撮つたりして、共有するという状況にあります。これまでと比べると、恐らく、私たちが生きている時代の中でこれほどたくさんの方の顔を見ている時代というのは、よくよく考えるといいのではないかと思ひます。

時代をさかのぼると、メディアが進化して、新聞やいろいろな週刊誌などの紙媒体で、似顔絵ではなく写真で犯人の顔など、いろいろな人の顔を見る、芸能人の顔を見るところというのが一つの変化です。その次に、テレビで芸能人を見るところという変化があつて、それが今はコンピュータの中で、芸能人だけではなくて、たくさんの方たち、普通の人たちの顔をたくさんシェアし合つて見たりしています。そういう中で私たちは生きています。

たくさんの方の文化の混ざりあう中にある日本人の私たちを考えてみると、でも何となく温泉に入るのは駄目というところもあるように、何か異文化に対する意識下のちよつとした抵抗感や忌避感があるのではないか。この意識しない忌避感・抵抗感というものを少しづつ明らかにしていつて、最終的には理解し合えればよい、それが私たちの目指すトランスカルチャー状況下です。いろいろな文化の人たちがミックスしている中で互いの違いを意識し合ひながら一緒に過ごしていくということに日本社会がなつていくのではないか、それについて貢献できる研究がこの心理学・文化人類学・哲学の三分野でできるならいいということ領域を設立させていただきました。

#5

ここに分かりやすいフィルムがあるのですが、実はこれは二〇一五年三月にドイツのメルケル首相が科学未来館に来館された際のロボットとの一コマです。意識しないところで、日本人は自動的にお辞儀で挨拶をします。一方で欧米人、西洋人の挨拶というのは握手です。このロボットは、初対面の挨拶はお辞儀をするというインプットされていたようですが、それがメルケル首相のさしだした握手とすれ違ってしまつて、動かなくなつてしまいました。ちよつと残念な感じがします。

私たちの周りでも何となく意識下でこういうことが起きていて、調整し合つて生きているのですが、こういうすれ違いというのは意識しないところで起きているのではないか、そういうところを見つけてみよう、そこから互いの理解を始めてみようということをこの領域は目標としています。

#6

床呂先生にもご紹介いただきましたように、例えて言いますと顔の中で表情というのは動物とも共通しているところがあり、そのため文化を超えた共通性を持つということで、ダーウィンから最近ではエクマンの表情研究が基本的な共通概念としてありました。

ところが、実は、こちらの研究は私たちの共同研究者の研究ですが、最近の研究から、表情をより詳細に検討してみるとそこには文化による違いがあるのではないかということが分かつてきています。

左側が欧米人の表情の平均顔で、Happy・Disgust・Angerです。右側が東アジア人の平均表情です。私たちは両方の表情が分かります。当然、両方の表情は分かるのですが、その表情において、強調しているところが実はちよつとだけ違うのです。

#5

(*・)

FACE & BODY

多様性の受容と相互理解へ

#6

Jack, R. et al (2022). Facial expressions of emotion are not culturally universal. *Proceedings of the National Academy of Sciences*

#7

日本人は目をより強調する、目で表情を伝えるというところがあるのですが、欧米人は口から表情を伝えるという違いがあります。何となく意識しなくてもどうにか普通にやりとりはしているのですが、もう一度日常のあらゆるものを見直してみますと、違いがわかります。日本発祥の絵文字の表情は、もともと日本の絵文字では目で表情を伝えていたのですが、ご覧いただきますように、それが欧米に伝わることによって、口元で表情を表現しています。

私たちの身近によくあり、許容している、日本人にとってのマスクもそうです。昔だったらマスクは病気の証拠で病気の人しかしなかったのですが、最近の若い人はメイクがのらないときとか、ちょっと気分が乗らないとマスクをします。昔だったらそれはどうよと思っていたかもしれませんが、何となく許容してしまっているところがあると思います。でもそれは欧米に行くと、ちょっとどうかと思われるわけです。

また、欧米ではもともと欧米人は眩しいということとでサングラスを掛けることがあります。それが室内でも普通にそのまま掛けていて、何となく許容されます。

#8

許容される場所の違いというのがもしかしてあるのではないか、それが私たちの表情を見る、注目する部分であるとか、表情をつくりやすい部分と連携しているのはいいか、そんな点も解明していけるのではないか。身体技法の違いなども含めて文化による違いを検討していきたいというのが本領域です。

#9

今回、公開シンポジウムでお話しされる先生と私どもがどういうチームを構成しているか

II 報告

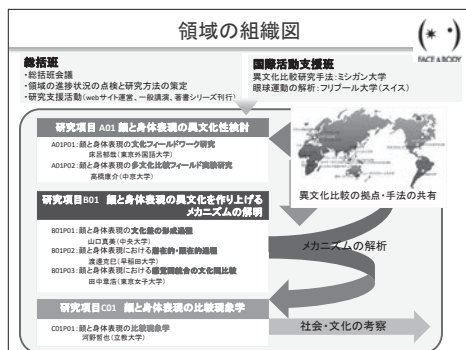
#7

目で表情を伝える日本人、口で表情を伝える欧米人

絵文字 (EMOJI) : 日本では目で、欧米では口で表情を伝える



#9



というと、まずは01班が文化人類学班でフィールドワーク的な研究で検証していただき、心理学の02班でメカニズムを説明しつつ、哲学の03班と連携して、より考察を深めながら、社会・文化にこの考察を提供していくという、こういう形で領域を運営していきたいと考えております。

また、本領域の特徴としましては、国際的にたくさんさんのサイトで研究をするということと、特に眼球運動の解析では先ほど出ましたスイスのフリブル大学、本日来られていますミシガン大学の北山先生のところでは異文化比較の研究手法をご指導いただきながら検討していくということになっています。

#10

硬いこと、つまり基礎研究だけでなく、社会還元として顔身体学カフェをはじめとして、さまざまな研究の中で分かってきた知見などを提供する場を作りたいと考えています。

冒頭のメルケル首相についてはちよつと残念だったのですが、実は挨拶というのは互いに調整し合いながら完成していくこともできます。オバマ大統領のときはうまくいきました。日本的な身体技法も世界に受容されているところがあるかと思ひますし、また、日本から発信する新たな顔身体表現であるプリクラなどで自己がどれくらい変わっても自分なのか。つまりトランスカルチャーというのはいわゆる一般的な文化だけではなくて、自分自身を越えること、性別も越えて自分自身も越えるというところも含めて、私たち自身を顔身体から知ってみようという試みにもなります。

こういう試みについて新しい知見を今後も提供してまいりますので、機会があればぜひ、いろいろな領域のイベントに参加していただけると幸いです。

#10



#11

ということ、まずは心理学から顔についてお話しさせていただきます。今日は一般の方も多いので、質問形式で始めましょう。

左の顔と右の顔、どちらの女性の方が美人だと思いますか。いきなりこんなお話ですが。今日はうちの大学の学生さんも多いので手を挙げてもらいましょう。上の二つの写真で左の顔の方が美人だと思う方。では、右の顔の方が美人かなという方。次に、下の二つの写真で、左の顔が美人だと思う人。二つを比べると、右側の方が左よりは美人だと思う人。

好みは変わりますよね。上で右が高かった、それで下で左が高かったです。実は上下の左側、右側は同じ人です。いわゆる人種効果ということで、日本人は外国人の顔のアイデンティティの区別は難しいのですが、なにが言いたいのかというと、同じ人物でも写真の撮られ方で魅力は変わります。私たちの顔はそんなものなのです。

#12

もう一つ、これは昨日も領域会議で話に上がりました。本当はこれはドイツのセレブ二人の顔の集合なのです。これは論文の著者の顔になります、本当に実験をやったときにはドイツの一番有名なセレブの二人の顔写真を並べて、何人の顔に見えますかというのを調べるのですが、これは到底二人の顔には見えません。実は二人の顔の写真の撮られ方がいろいろと違って、五、六人の顔だなと見えてしまいます。つまり写真の撮られ方によって、「人の顔って分からない、私たちの顔を見る能力はそんなものなのだ」と思います。

#13

ところが、この論文についているその次は、これは昔なのでちょっと年がいつている人向

II 報告

#11

左右のどちらが美人ですか？



Fig. 6. Attractiveness judgments can be reversed by photo choice. One of the photos on the left show one person, and back of the photos on the right show another person. In the top row, most observers judge the face on the left. In the bottom row, most observers prefer the face on the right.

同じ人物でも、写真の撮られ方で魅力が変わる！

#12

何人の人がいますか？



Fig. 4. Sorting face pictures by identity is a difficult task, unless the faces are familiar. The solution for this set is given in Appendix 1.

きですが、これは一体、何人の顔ですか。この人の奥さんのことを知っていたら、若い人も分かるかもしれないですが、実はクリントン元大統領という一人の人なのです。若い人には分かりにくいかもしれませんが、元大統領を知っていれば、全然顔つきが違って、若いときでも年を取っていても、知っている人だと同じ人と分かります。

これはどういうことかという、私たちが顔を見る見方というのは曖昧なのだけれど、知っている人物の顔の見方は特殊で、たとえこんなふうに年齢が変わったり、髪の毛も白くなったとしても分かるのです。

#14

これは若い人バージョン（といってもちょっと古い）ですが、ではこれは何人の人ですか。すぐ分かりますね。三人、四人ではなくて、これは二人です。これも同じことです。知っている人だと、この顔はこの人とはつきり分けることができるのですが、知らない人だと写り方次第で印象も変わるし、だれだかよく分からないです。

私たちの顔を見る能力というのは、そんな不思議なところを持っています。そういうことが心理学で分かってきました、そういう知見もいろいろ広めて研究していきたいという、今日はそのベースとなることをお話させてもらいます。

#15

顔の研究で心理学で最初に言われていた不思議な現象は、何でしょうか。昔のサッチャー首相の顔ですが、逆さまにした顔を正立にするとわっとした変顔になってしまいます。顔が逆さまだと認識が困難だけれど、正立にすると分かりやすい、そういう効果もあるのです。

倒立顔効果



「顔」は逆さまだと認識がより困難となる
「倒立効果」は顔認知で強い

#15

何人の人がいますか？



顔の記憶は意外にあいまい！しかし・・・知っている顔はよくわかる！

#13

#16

もう一つあります。上の顔と下の顔、どちらの顔が男に見えますか。上の顔の方が男っぽいと思う人、手を挙げてください。では、下の顔の方が男っぽいと思う人。上の顔の方が正解です。でも実は、カメラといって、二つの別の顔を左右に分けて貼り付けて、それを左右逆転しています。同じ顔の左右を逆にしただけです。

どうということかという、私たちは人の顔の印象を左視野で判断しています。左視野で上が男性の顔で、下が女性の顔です。自分の左視野にきたもので顔を判断します。スライドには「脳のイタズラ」と書いてありますが、私たちが顔を見るときには、表情と顔に対する脳のネットワークを使っています、このネットワークで顔を見ます。そして、左視野につながる右半球に顔領域があるといわれています。

#17

情動に関わるもの、感情に関わるものや、美しいなどの価値判断に関わるもの全てを含めて顔を見えています。この脳内ネットワークの連携で見ているので、私たちは顔を見るときに、さまざまな現象が生じるのです。

文化によってどのようにこのネットワークが変わってくるのか、変わらなところがあるのかということが検討できればと思います。

#18

ちなみに、この数年ずっとお話ししてきた赤ちゃんの映像を一度もお見せしなかったのですが、今回は赤ちゃんの実験映像をお見せします。私どもは八カ月までの赤ちゃんを対象に顔を見る能力を調べています。なぜ赤ちゃんなのかというと、新生児でも顔は分かることが出

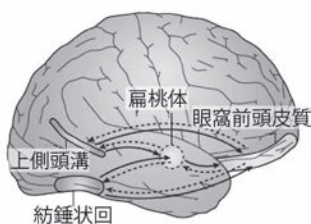
#16

どちらの顔が男に見えますか？（脳のイタズラ）



#17

表情と顔認知に関わる脳のネットワーク



Leppänen, J. M., & Nelson, C. A. (2009). Tuning the developing brain to social signals of emotions. *Nature Reviews. Neuroscience*, 10(1), 37–47. doi:10.1038/nrn2554

Ⅱ 報告

発点だからです。

映像は生後三カ月と八カ月の赤ちゃんで、赤ちゃんの目の前のコンピュータのモニターにこのような顔の映像が流れています。赤ちゃんは顔を見るのが大好きで、このように三カ月でも八カ月でも見ることがわかります。私たちは新生児のときから顔に引き付けられて顔を見ることがをしていますし、三カ月、八カ月でも見方は発達しますが、好むことはずっと続きます。

そのもとは何かということ、でも、知っている人だと顔の見方が違うというところを、あと一〇分ぐらいでお話しできたかなと思います。

#19

こういう顔のお遊びもたくさんありまして、私たちは顔を見ることはすごく得意というか、面白く感じるわけです。

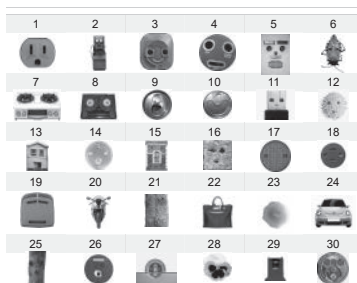
#20

そして私たちは顔を見る能力が非常に鋭敏で、例えば新生児もそうなのですが、赤ちゃんでもこういうものに顔を見いだして喜ぶことができます。

#21
#22

これは大人の研究なのですが、顔に見えるもののランキングです。シュミラクラ、パレイドリアとも呼ばれ、赤ちゃんでも大人でもこういうものが大好きで、よく見ます。

Face-like objects ("face-like" ordered)



#19
#22

かおをさがそう！
どこに、かおがある？？



#19

#23

一体そのポイント、顔を見るおもとのポイントは何か。新生児でも顔を見ますと一言で言いましたが、そのポイントは何かというと、目・鼻・口の配列です。目が二つ、口が一つを顔と見ます。新生児のときからこの配置に気づく能力を持ち、大人でもそういう能力を持っているために、顔でないものにも顔を見て喜ぶことができるのです。それは子どもでも大人でも同じです。しかも新生児でもこうした配置を好んで見るということが分かっています。これが私たちが顔を見る出発点です。

#24
#25

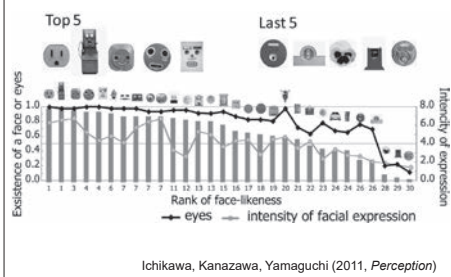
では次に、どうやって知っている人に対する顔の見方を獲得していくかということがもう一つのお話です。実は生まれたばかりの赤ちゃん、そして生後三カ月の赤ちゃんでも視力が非常に悪いのです。視力が悪いけれども顔を見る、これが非常に重要なことです。つまり、よく見えないのに、なぜか目・鼻・口のポイントがあるとところで顔を見ることができのです。それが実は、私たち大人も含めて、顔を見る能力の基本的なことを培っているのではないかと考えています。

#26
#27

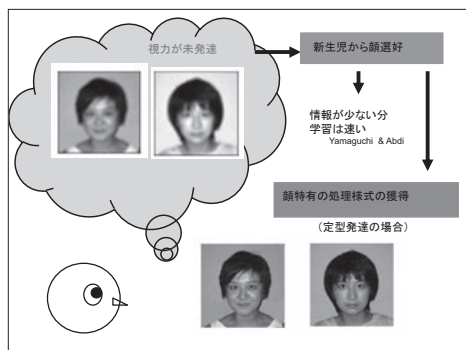
どうということかという、顔を見る能力には個人差があります。その一つは、発達障害の中の自閉症児と呼ばれる方々、顔を見る能力、社会的能力が弱いと言われています。彼らの六カ月時点の視力を測りました。詳しく言いますと、自閉症の子たちの六カ月時点の視力は測れません。自閉症は三歳にならないと診断されないのです、その妹、弟の結果です。その子たちの視力の検査と色の検査をしました。自閉症の資質は遺伝する前提で行われた実験で

#22

物体に「目」「表情」があると、顔としてみられやすい



#24



すが、三歳時で自閉症と診断された人はいなかったそうです。

それで何が分かったかというと、自閉症の子たちは小さいときは視力がいいのです。普通の子よりも視力がいいということが分かったのです。視力がいいがために、顔を見るときに、ぼけた画像の顔ではなく、目鼻立ちの細かいところもほくろもはっきりした顔で学習していくと、全体で顔を見るのとは違う顔の見方、部分部分に着目する見方におちいるのではないのでしょうか。例えばビデオで人が会話しているときの自閉症とそうではない子たちの視線をアイトラッカーで解析すると、注目する部位が違うことがわかります。健常の人たちは目と目を見るのですが、自閉症の子たちは口元や目立つところを見てしまうという、顔への見方がちよつとずれてしまうということがあります。

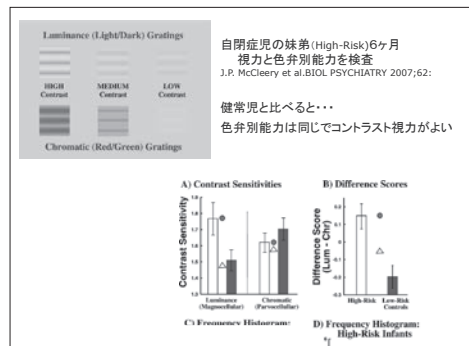
#28

先天性の相貌失認という人たちも、人口の二%いるのではないかと言われています。これは、生まれたときから顔を見る能力が弱くて、でも本人は気づかないために、そのまま済んでしまっているけれど、うまく人の顔が覚えられないので、うまく社会にとけこむことができなかったりします。人の名前は名札で覚えたりしているうちに、名札がないと分からなくて混乱してしまって、大人たちとうまくやりとりできない。大人になっても、そういう人はいるのではないかと考えられます。

#29

逆に、認知症になると病的に顔を見る能力が加速してしまうということもあります。レビー小体型認知症者のデータですが、私たちも様々なところに顔を見ることができるようですが、普通の人が顔と見えないところまで顔を見てしまうのです。ここから顔を見る能力にい

#26



#28



ろいろな個人差もあるということが分かります。

#30

最後に、重要な顔を見る能力、親しい人の顔を見る能力の法則は何かというと、先ほど話した生後三〜八カ月の間に学習するところがポイントで、それは全体で見ることの発展です。ご自身のお母さん、お父さんやあるいはごく親しい人の顔の、目だけを思い出せる人はいますでしょうか。いませんよね。時々いることもあるので、もし目だけ思い出せるのだつたら、「右目だけ思い出せる人はいませんか」と聞きます。そうなると、確実に誰もいません。実は、私たちは顔を見るときは全体で見えてしまつて、個別の部分に分けて見ることができない性質を持っている、その証拠です。

これがそれを測るテストの一つなのですが、ちょっとこれも古くてすみません。有名な昔の二人の大統領の顔を上下で分けています。上下で分けた別々の顔をくつつけます。びつたりくつつけてしまうと、そこに上の人の顔だけを思い出すことはできません。これはレーガン大統領とクリントン大統領なのですが、「この上の人の顔は誰」と聞かれたときにレーガン大統領とは答えにくく、私にはダスティン・ホフマンに見えるのですが、違う人の顔に見えると思います。それが顔をずらして顔と見なくしたとたん、誰だかわかります。顔ではないと上下ばらばらに部分で見ることができのですが、顔になると上下ばらばらの部分で見ることができないのです。

これこそが私たちが顔を見るときに、部分で見てくださいということができないことです。顔を見るときは全体で印象を見る。全体の印象で顔を見て、特に見知っている親しい人には全体の印象で見る効果が強くなるので、冒頭のたくさんさんの写真も、年齢が変わっても同じ人というのが分かるということになります。ちなみに、これは八カ月の赤ちゃんでもでき

#29

パレイドリア現象: 病的な鋭敏さ

BRAIN

Pareidolia: complex visual illusions in dementia with Lewy bodies

Yoshiko Ishiyama, "Psychiatric Medicine" (Springer-Verlag), "Recent Advances in" "Lewy Neurodegeneration" and "Brain Aging"



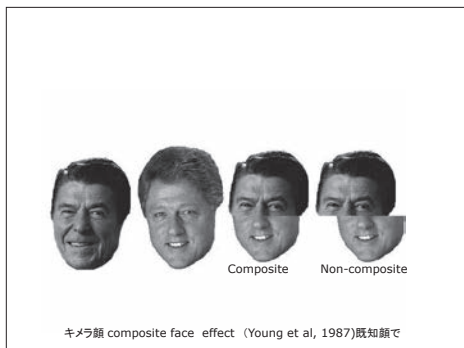
あいまいな形に意味ある物体(人や生物)を見る錯覚

レビー小体型認知症者の幻視で特異的に多い

△ ヒトの顔

△ ヒトや動物の形

#30



るという結果になっています。

#33

こちらの図では、顔というのはポジネガを反転すると人物が分かりにくいんだけど、目だけがポジだと分かりますという図です。

#35

私たちの顔を見る能力とその根源について今日はお話ししました。もとは目・鼻・口だけで顔が分かるという、この能力です。これが学習していくことによって、特に視力が悪い乳児の段階で全体的なイメージをくり返し学習することによって、私たちは顔を全体的な印象で捉えるようになります。それがたくさんの人の顔を覚えるという方向につながっていくということになります。その辺りで私たちの文化的特性をもった、私たち自身をつくる場所になるかと思っています。

#37

最後にもう一度、顔身体学カフェの宣伝です。今日はちょっと詰め込みでたくさんお話ししましたが、顔身体学は本日のような一方的なお話ではありません。もうちょっと気楽に顔について語りあいましょうというものです。

私は一般書も書いていますが、一般書で書いたように、例えば美人は得をするのだろうか、顔で損をしていないか、道を聞かれやすい顔なのか、近づきがたいと思われる顔なのか、もう一度自分の顔について考えてみたい。あるいは人間関係や、本日も話した認知症の話、自閉症の話、それはどれも社会関係がうまくいかないというのは、実は顔を見るとこ

#33

Effect of contrast reversal
on face recognition in infants



Gilad et al. (2009)

Otsuka Y., Motoyoshi I., Kobayashi M., Hill H.,
Kanazawa S., Yamaguchi M.K.

ろがちよつとだけずれていることによる可能性もあります。

昔話のいろいろなことも、顔から読み解いてみましょうというのもあります。シンデレラは実は、姉より妹の方が美人だと得をするのか損をするのかという話かもしれないし、白雪姫は今の話でいえば、お母様が美魔女だと家族がハッピーなのかとか、そういういろいろな具体的な話について、あるいはもつと自分自身の話をするというところをやっているように思っていますので、よろしければぜひ、まだ募集中ですのでご参加いただければと思います。私の方からは以上になります。どうもありがとうございます（拍手）。

（床呂） 山口先生、どうもありがとうございます。心理学内部でのご研究の話はもちろん、科研の新しいプロジェクト、新領域の全体に関わるご説明、イントロダクションを頂けたのではないかと思います。

それではプログラムに従いまして、次は引き続き、心理学系の研究領域分野からのご発表ということ、早稲田大学の渡邊先生から「潜在的な顔身体コミュニケーションと個人差」ということでお話しいただければと思います。

準備はよろしいでしょうか。お願いいたします。

「潜在的な顔身体コミュニケーションと個人差」

渡邊 克巳（早稲田大学理工学術院）

ただ今ご紹介いただきました渡邊と申します。このシンポジウムは、実は三回やっているのですが、毎回話していてちよつとネタがなくなりつつあります。今回は領域がスタートしたので、昨日領域会議で話したことは寝ていてもらって構わないのですが、その後には身体コミュニケーションのところを中心に話していきたいと思っています。

#2

新領域には班というのがありまして、それぞれ文化人類学、心理学、哲学だったりします。われわれはどちらかというと心理学や脳科学というところが中心になってやっています。特に潜在的なものと顕在的なものの関係性に興味を持っています。プロセスを知るためには、無意識的な潜在処理過程を調べなければいけないのでということで、眼球運動や皮膚電位、脳波を使って調べていきます。

#4

そのために、生体信号や実インタラクションでの計測も行うということが、われわれの班の立場になっています。

#5

文化差のようなものを調べるときに、基本的にわれわれのストラテジーとしては意識と無

意識のようなものをキーワードに研究を進めていきます。あと、仮説ドリブンとデータドリブンという考え方も重要になってきます。

#9

昔、顔の表情は六つあるとエクマンという方が言いました。普遍的だという話があるのですが、このカテゴリは誰が決めたかという点、いろいろやってみて、いろいろな文化に持っていて皆さんが分かるから、この六つは普遍的だ、これにしようとなったのですが、そんなわけではないというのが先ほど山口先生、あるいは床呂先生がおっしゃったように、六つの表情というのはそもそも普遍的なのかという疑問が最近出てきています。

#10
11

そうすると、例えば制約を緩めて、顔表情の動態と表情の言語表現の対応を取ったり、あるいはデジタル画像で操作する記憶の再生課題をつくって、顔をこちら側でつくらせるというところをもつて、顔表情を調べたいというようなやり方を取るところをやっています。

#12

さらに顔表象空間を定量化して文化比較ということもやっています。われわれは心理学やデータ処理ということを通して、顔というものを見直すということをやりたいと思っています。

#13

あとは形態情報のようなものも定量化していきたいです。つまり、顔というのは基本的に

は形なわけです。形とはそもそもどうなっているのかというデータが非常に欠けているので、それに関するデータを集めていくということをやっていききたいです。

#14

データ駆動型処理による顔魅力印象の数値モデル化、つまり顔印象というものを数値に落とし込んで、何らかのモデル化ができないかということをやっています。もし時間があれば、ポスターを説明している中村君をつかまえてちょっと話を聞いてもらえればいいかなと思います。

もう一つは、動的な顔データベースというのもつくりたいと考えています。動的な顔データベースをつくりたい理由というのは、われわれが顔の研究と言ってきたときに、一つ問題点として「われわれは顔の写真の研究をしていたのではないか」という疑念が出てくるからです。顔の研究をしていないのではないかという話です。

われわれが日常生活の中で顔を見るときというのは、動いている顔を横から見たり、斜めから見たり、目の端っこで見たりします。

#19
#20

顔というのはすぐ分かると思っている人がいます。一秒以内に分かるので、すぐといえませんが、一秒というのは、われわれ認知心理学者などにとってはとてもなく長い時間に感じられます。一秒あったら何でも、ほとんどできると思ったりするぐらいです。

そうすると、例えばパーツ特徴がそれぞれのように魅力に形成されるか、実は一秒の間に目の魅力度、鼻の魅力度、口の魅力度がどうやってインテグレートされるかという研究が可能です。

#21

例えば顔全体を見せて、顔の魅力度を評定するとか、目だけを見せて魅力度を評定するか、その人の鼻だけ、口だけを見せて魅力度を評定するというをやって、それぞれ目と鼻と口の魅力度が顔全体の魅力度にどのように統合されていくかということを調べます。

#22

基本的には目の魅力度が非常によく効きます。最初の一〇ミリ秒、二〇ミリ秒、それを出しただけで目が魅力的だというのが分かります。その魅力度というのは顔全体の魅力度に非常に強く影響を与えるのですが、だんだん鼻の魅力度と口の魅力度が入ってきて、最終的に顔の魅力度が形成されるということが分かっています。

#23

これも先ほど言ったように、われわれは顔というのは一瞬で分かると思いますが、実はそんなに簡単に分かっているなくて、ぱっと分かったと思う顕在的な過程、意識に残る「この人かわいい」「この人きれいだ」と思ったときに、実は頭の中で複雑な計算をしていて、目の魅力がこれくらいだから、こうというのを計算しているということになります。

予測するというのはすごく重要な話で、例えばサングラスを掛けているときに、こちらを見ているかどうか分かりません。そのときに、この人が自分を見ているかどうかを予測しなければいけないわけです。そうすると、われわれの見る側のストラテジーというものを研究することができます。

ですから、顔の研究というのは、一つは顔そのものの、刺激の研究もありますが、もう一つはその顔を見ようとしているわれわれのやり方の研究というのが出てきます。それがわれわ

れが先ほどから言っているプロセスです。結果として顔がどうかという話ではなくて、顔をわれわれがどういうふうに見ようとしているかということを研究していくというのが主題になっています。

#30

トランスカルチャーという話が出てきたのですが、それをやるといつも個人差ということを考えなければいけないわけです。つまり、カルチャーの違いと個人の違いは何だという話です。そうすると、個人の違いというのはどれくらいあるかというのは、実は調べないといけないです。つまり、われわれの中で、一つの集団と思われている中どれくらいの分散があるのかというのを知らないと、文化差を考えることができないわけです。

また全然違う話ですが、この新学術が始まりかけてからスタートした研究で、そもそもわれわれは顔をどれくらい覚えられるかという話です。顔は結構覚えられる、私は一〇〇人ぐらい、二〇〇人ぐらい覚えられると思っていますが、恐らくそうではなくて、われわれの研究からは一〇人が限界だろうということです。

これはなぜ一〇という結果が出たかというと、顔だけを切り取ったからです。髪型を取り、服も取ります、顔だけで一体どれくらい分かるかというと、恐らく一〇ぐらいが限界です。実は物体に対しては、われわれはすごくいいぱい覚えられます。一〇〇個でも二〇〇個でも覚えられるのですが、顔というのは、顔だけで考えると一〇個です。

そうすると、今度また顔の定義というのが変わってくるわけです。顔というのは顔の表面だけ見ているのか、髪形も含めてそうなのか、あるいはしゃべり方も含めて顔と見なしいいのかというようなことを、もう一回問い直すことになるのではないかと思っています。

それにもかかわらず、それに関して個人差があるというのは別です。実際に全然覚えられ

ない人もいます。ものすごく覚えられる人もいます。この差が一体何に対応するのかというのを今後調べていきたいと思っています。

実は今回この領域を立ち上げるときに、「顔・身体」と付けました。やはり顔は今までやってきた研究がいっぱいあるので、顔の話は出てくるのですが、身体インタラクションの話をちよつとしていきたいと思います。

われわれの研究では「無意識な同調」という現象を使います。なぜかというと、社会性のようなものを考えたときに、社会的に仲良くなりましょうと言つてやるという話、あるいは友達同士の会話を分析するなど、そういうことではなくて、すごく原始的な同調や体のインタラクションを扱いたいからです。

##

それをミニマルアプローチとわれわれは呼ぶわけですが、例えば生まれて一―二時間くらいの赤ちゃんが、模倣するという話があります。模倣学習というのが非常に強く出ている人がべろを出したら、べろを出す、口を開けたら口を開ける、口をすぼめたらすぼめる、笑ったら笑うという、目の前の顔をすぐに模倣する現象です。赤ちゃんというのはそもそも模倣マシーンで、出てきたものをすぐ模倣するようにできています。

これは非常に不思議な話で、よく考えると、目の前にある口が自分の口の筋肉と対応しているということが分かっていないとできないわけです。だとすると、こういう模倣のシステムがもととビルトインされていて、模倣を通してわれわれは社会というものを学習しているのではないかということになります。

#41

こういうこともあつて、われわれは意図しなくても人を真似する傾向というのがあります。が、ちよつと前にやつた研究で行動速度の感染という実験があります。

例えば非常ににせかせかしているような社会の人はしゃべりも早くなりますし、やはりゆつたりしたところにしばらくいると、だんだんしゃべりが遅くなっていきます。なぜこういうことが必要かというと、相手と話しているときにしゃべりの速度が違つと、全然コミュニケーションができないわけです。インタラクティブできないです。つまり、同じ速度にチューンするということをしないと、インタラクティブがうまくできないのです。

そういうこともあつて、われわれ実験心理学者がどういふふうの研究するかという話なのですが、実際に人が早く動いているようにして、どうこうするということは難しいので、ミニマルアプローチでなるべく刺激を単純化します。バイオロジカルモーションというのですが、関節の点の動きだけを出して、それが動きに見えるという現象です。つまり、点だけを見たときに違いが分かるということを使って実験をします。

実験は非常に簡単で、バイオロジカルモーションの刺激を見せた後に、なるべく早くボタンを押すということをします。

#42

結果は人が目の前で早く動いていると、われわれはボタンを早く押し、人がすごく遅くなつていると、遅く押してしまいます。これはなぜかというと、ボタン押しのような非常に単純な課題ですら、われわれは他者の影響を受けているということを意味します。つまり、ボタン押しはこれが限界だと思つていただけで、周りが早いと自分も早く押してしまうし、周りが遅いと、早く押せないということがここから見て言えます。

43

これは身体や行動みたいなのが絶対的に個人で確定・確立して測れるわけではないということを意味するわけです。この人の反応時間が何ミリ秒と分かって、それは横に誰がいるか、目の前で何を見たか、他の人がどうやっているかに依存して変わってしまうということに対応します。

重要なのは、自分の能力の限界だと思ったことが、実は社会的・心理的限界であることへの気付きだということで、自分の身体や行動が自分のものだと思っているのだけれど、それは実際に社会の中に埋め込まれています。だから他の文化と会ったときに結構、違和感があるわけです。われわれとはチューニングが違うという状況になっていて、それが何となく違和感として表れているのではないかというのが私の一つの考え方になります。

別にこれはさらにリッチなこともできて、三六〇度のシアターの中で、その中のスピードが一・二倍になっているような状況をつくって、そこに一時間ぐらいいてアダプトしたら、どうなるかという実験を最近やってみようかと思っています。

##

恐らく全然時間が足りないので、この辺は飛ばして、最終的にわれわれが知りたいことの背景にあるのは、一人だけを調べる時代はもう終わったなということです。実際に自分の能力にせよ、顔認知にせよ、自分の体にせよ、それは実際に相手の周りに誰がいるか、どういう中でやっているかということによって規定され得るということになります。

つまり、学校の入学試験のように、一つの試験だけでこの人はどういう人ですと言っても全然意味がなくて、実際にこの人はこういうところに入れたらこういう人だ、こういうところに入れたらこういう人だと。文化というのは、そういうふうに定義されるべきで、文化と

いうのは自分と離れて歩くのではなくて、自分の認知もそうですし、パフォーマンスもそう、感情もそうですが、あくまで外から影響を受けています。それは全然悪いことではなくて、もともとそういうものだということを考えていきたいと思っています。

今回の研究トランスカルチャーというのは、自分が最初に海外に行ったときに、何か違和感があるなと思いました。その違和感は何だろうという素朴な疑問が出てきてほしいわけです。あるいは例えば違和感があつたときに、その違和感というのは「別な国だから、別な文化だから」で終わらせるのではなく、しかも言葉にできるわけでもないのですが、何となくもやもやした感じというのを、きちんと科学のまな板の上にのせて、料理することができるようになるといいなと思っています。

毎回いっぱい話してしまつて、話が途中になつてしまふのですが、潜在的な話や微細なところと、あるいはわれわれが感じ得ないようなものとして、文化というのは存在していて、それがきちんとコミュニケーションや顔身体認知の土台になっているということを、この五年間でやっていきたいと思っています。ありがとうございます。

(床呂) 渡邊先生、ありがとうございました。潜在的な顔身体コミュニケーションに関する、非常に刺激的な、私自身も個人的に大変面白いなと思つたエピソードが、行動の速度の感染や模倣など、いろいろあります。それから、先生もおっしゃったように「トランスカルチャー」というキーワードを今後考えていく上でもヒントになる、さまざまなお話があつたのではないかと思います。

それで、プログラムのにはここでいったん休憩を挟ませていただければと思います。

(床呂) それでは、プログラムに従いまして、シンポジウムを再開させていただければと思います。ここまでどちらかというと、心理学系の実験科学的なアプローチが続いてきましたが、次の中京大学心理学部の高橋先生のグループによるご発表は、ちょうど実験的なアプローチ、心理学的なアプローチと、どちらかというと人類学的もしくは霊長類学等のフィールドサイエンス的なアプローチのちょうど学際的融合、コラボレーションに関するご発表ということになるかと思います。

それでは、高橋康介先生、準備はよろしいでしょうか。それではよろしく願います。

「続・顔と身体表現の多文化比較フィールド実験研究」

高橋 康介（中京大学心理学部）

島田 将喜（帝京科学大学生命環境学部）

大石 高典（東京外国語大学現代アフリカ地域研究センター）

銭 琨（九州大学持続可能な社会のための決断科学センター）

（高橋） こんにちは。高橋です。今ご紹介いただいたように、私は中京大学心理学部で、出身は実験心理学です。幸いなことに、ここに名前がある島田さん、大石さん、銭さんの中では、銭さんは心理学なのですが、島田さんは霊長類学、大石さんが文化人類学ということで、うまい具合にチームを組んで、ちようど実証的な心理学的研究を文化人類学的ないろいろなフィールドに持ち込んで、ここ数年行っています。「続」と書いてありますが、実は昨年もここで話したのですが、その内容が少しアップデートされているので、それを紹介したいと思います。

領域関係者の皆さんに関しては、昨日と半分以上かぶっているものでちょっと申し訳ないのですが、後半は、フィールドで実験をすることはどういうことか、アフリカや子どもたちはどういう状況にあるのかということを、少し映像を交えて紹介したいと思います。ですから、顔身体と直接は関係しない部分もありますが、皆さんが何か考えるヒント、きっかけになればいいかなと思って、少し子どもたちに焦点を絞って説明したいと思います。

#2

前半は、顔の研究について紹介します。これは有名な、もちろんわれわれには文化比較の

研究は山ほどあって、ただ、多くの研究は、先ほど渡邊先生からお話があったように、東アジア対西洋、その『木を見る西洋人 森を見る東洋人』であるとか、カルダラさんたちの一連の研究、また、これはインフォグラフィックなのですが、認知スタイルや思考のスタイルが東洋と西洋では典型的に違いがあるというポートレートが出されています。

#3

この基本的な考え方は、入力があつて、われわれの生体があるわけですね。脳があり身体がある。その中で受け取った情報が処理された結果、出力、思考・認知・知覚・行為・運動として現れてくるというわけです。そこに文化的な差異があるだろうということを主に西洋と東洋で比較してきたという歴史があります。

#4

これはちょうど一年ぐらい前に『Nature』に発表された論文で、私たちの研究ではなく他の人の研究ですが、南米のボリビアに行つて音を聞かせるということをやった人たちがいます。どういう音かという、いわゆる不協和音、われわれが聞くとすごく不快を感じるような音を聞かせました。そうすると、どうもこのエスニックグループの人たちにとっては、その不協和音自体はそこまで不快に感じられなかったという結果が出てきました。

#5

こういう話は、東洋と西洋、いわゆる文明化された二つの集団を比べてもやはり見えてこなくて、われわれのやろうとしていることは、異文化から多文化へということで、東洋・西洋に限らず、世界中のいろいろなフィールドにアクセスしてデータを取っていく活動をして

います。

#6

その中で重要なのは、文化人類学と実験心理学のコラボレーションです。しかもディープなということが大事で、ディープな学際融合を心掛けてやっています。これまでも実は文化人類学と実験心理学のコラボレーションの試みは山ほどありましたが、実際のところ、やりだすといろいろと問題があります。われわれもいろいろな問題を抱えているのですが、幸い、一緒にやってくれている人たちはみんな比較的若くて元気で、好きなことを言い合える仲間もあるのです。そういう意味で、アカデミアだけのつながりだとコラボレーションするのは非常に難しいところを、プライベートな関係、先輩後輩関係だったりするので、このディープな学際融合を築けていることが、われわれの活動の一つの推進力になっているのは多分間違いないと思っています。

実験心理学として実際に、フィールドに出てデータを取りますが、取ってきたデータの解釈が心理学者には厳しいのです。なぜなら、そのエスニックグループがどういう環境に身を置いていて、彼らが何を見て、どういう生活をしているかということは、私も行きましたが、なかなか心理学者だけでは厳しい。その中で文化人類学者のセンス、ものの見方という助けを借りて、実験心理学と文化人類学のぐるぐるした循環をうまく使って、新しいことを言っていきたいということをやっていきます。

#7

実際アクセスしているフィールドは、現在アクセスできているのは、錢さんが主に東南アジアや北欧、北米に行ってデータを取ってきて、私と島田さんとで東アフリカのタンザニア、

ケニア、カメルーンにアクセスしています。ゆくゆくは南米に行きたいという思いもありますが、まだ今のところ南米までは手を出せていません。

#8

大体どういう経緯でやってきたか。二〇一〇年ごろ、七年ぐらい前、島田さんと私で「何かちょっとやってみたいね」という思いがありました。ただ、やってみたいとは言っても、もちろんやる上でプラクティカルな問題が本当にたくさんあります。例えば調査許可を取ってやるとか、実験課題などです。私はもともと実験心理学なので、課題をつくるのは平気なのですが、私の考えでつくった課題は、その現場、フィールドに行くと、大概使えないわけです。

そういう感じで、最初は紙と鉛筆で取ってみたい、でもデータが取れないとか、この辺からはタブレット端末を導入して、フィールドの人にボンと渡してやってもらったのですが、そうするとだんだんデータが取れてきました。去年あたりからきちんとしたデータがどんどん集まってきて、論文がこの前、出しました。

#9

具体的にどういう研究をやっているか。「タンザニア・カメルーンにおける表情の認識と表出」という話を少しだけしておきます。

#10

タンザニアとカメルーンは、こんな感じでアフリカ大陸があって、東にタンザニア、西にカメルーンがあります。この二つの国は基本的に全然違う場所にあると考えていただいて結

構です。同じアフリカという言い方をしますが、基本的には全然違う、エスニックグループも違うし、全然違う環境です。

#11

実験風景はこんな感じでした。実験心理の方がいたら、こういうやり方でデータが取れるのかと思うかもしれませんが、完全に野外・屋外、なるべく日が当たらない場所で人を見つけ、タブレットを出して実験をしてもらっています。

#12

こんな感じでした。バラバラと人が集まってくるような状況で実験をしています。

#13

もつと人が集まってきます。子どもが周りにいるとどんどん集まってきます。

#14
#16

最近は何をやったか。先ほど渡邊先生、山口先生から話がありましたが、表情認知がユニバーサルなのかどうかをリアルフェイス、いわゆる絵文字、*emoticon*と言われるものを使ってやってみたという研究があります。

これには六種類の顔があり、三つはリアルフェイスで、三つは絵文字です。それぞれ、笑顔、ニュートラルな中立顔、ちょっと悲しい顔という全部で一八個の刺激があります。この刺激をタブレット上に、ランダムな順番にぽんぽんと出していきます。それぞれの刺激について「笑っていると思うのか、泣いているから悲しいと思うか評定してください」と、その



写真1

表情を認識してもらう課題を行いました。

#15

結果はどうなったか。赤い線と緑の線がそれぞれカメルーン、タンザニアです。青い線が日本の被験者の結果です。正直なところ、リアルフェイスに関してはほぼ差がない。ただ、本当の表情、本当の顔写真の表情の認識についてはほぼ差はない。ここの辺に少しあるわけです。アジア人の悲しい表情などは、少し誤認識されたりします。恐らく、今までの文化比較の表情研究ではこういう差を捉えていたので、本当にユニバーサルなのか、そうではないのかという議論がいつまでもずっと続いていたのだろうなと想像しています。

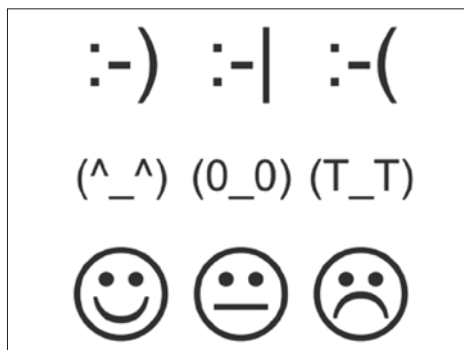
ところが、絵文字に関しては状況が一変して、青い線の日本人の認識は、当然と言うとあれですが、笑顔の絵文字に対しては笑っている、泣き顔の絵文字に対しては悲しいという評価がなされます。

けれども、カメルーン、タンザニアでは、線がほぼフラットになっています。これは何を意味するか。この三種類の絵文字、スマイルでニコツとしたのと、中立と、悲しいという顔についても、感情的読み取りがなされていない、これとこれの感情の差が認識されていないことを意味します。これだけ世の中に広く使われていて、われわれが見れば直感的に笑っていると思うわけですが、そういうことが、文化が違う、地域が違う、エスニックグループが違ふところでは、決して同じとは言えないという結果が得られています。

#16

これをまとめた論文が最近出ました。海外の人は結構興味があるようで、“Psychological Today”やウェブメディアなどで紹介されたりしています。

写真2



とは言つても、例えばアフリカに行つて、タブレットを渡してやつてもらいました。やはり方法的な問題で何かおかしいことが起こっている。要するに、本当なのか、実験の問題なのかは、やはり私自身もこのデータを取った後は半信半疑だったわけです。というのは、あまりにも「これはやはり笑顔でしょう」となるわけですよ。「笑顔でしょ、これは」となるわけだけど、そうはならなかったということで、本当に彼らはそれを笑顔と認識していないのか、何か方法の問題があつたのか、半信半疑でした。

しかし、今年、タンザニア、カメルーンなどでデータを新しく取つて、今はほぼ確信しています。それを少しお見せしたいと思います。

#17

やつたことは非常に単純で、イラスト描画課題というものを行いました。課題としては、私が描いたのですが、下手くそな顔が真ん中にあつて、なるべく意味を持たないような抽象的なニュートラルな顔です。「この笑顔を描いてください」「この泣き顔を描いてください」という非常に単純な課題をやりました。

#18
#21

これは日本の大人です。大学生だと思いますが、こんな感じで、恐らくこれは皆さんが想像するような、皆さんに「これを描いてください」と言うとかんな感じになると思います。ニコツと笑つたり、これはちょっと上手なのですが、こんな感じになったり。

#22
#23

これは子どもが描いた絵です。大体このような想像がつく感じです。

#24
28

フィンランドはどうか。これは錢さんが取ってくれたのですが、本当にフィンランドはすごくシンプルです。日本よりも大体シンプルな顔が描かれています。でも、笑顔に関してはニコツとしているということで、大体想像が付きまします。

#29
33

タンザニアはどうだったか。様相が一変するわけです。中立顔は同じ課題を与えて、「笑顔にしてくださいね」と言うときに、何て言うのでしょうか、そもそもこれが顔として認識されているのかどうかよく分からなくて、「描いてください」と言うと、非常に写実的というか、要は、われわれが考え付かなかったような特徴が描出されるわけです。これはこの人だけではなく、そういう人がいっぱいいて、こんな顔とか、この場合は何でしょうね、これは笑顔になっているのか、ちよつと分からない。でも涙が出ているので、これは泣き顔なのでしょうが、何とも解釈しがたいなという感じで、このような絵文字がでできます。

#34
39

ではカメルーンはどうかというと、こんなような感じです。「こんなような」というすごく曖昧な説明で申し訳ないのですが、できれば定量的なデータ解析をしたいのですが、まだそこまで至っていません。こういう顔が描出されます。

これはポスターに笑顔が出ているので、興味があれば、ポスターを眺めてみてください。世界は多様であるということをしごく再認識させられました。

#40

全体として言えることは、基本的に「表情を表してください」と言うときに、目より口が重要です。ただ、笑いの口には非常に多様性があつて、東洋と西洋だとニコツという口が描かれるのですが、アフリカでは基本的に歯が出るというパターンが多いです。実際、私たちが笑うときに、こういう口はなかなかなくて、こういう口になったら基本的に歯が出るわけですね。そういう意味では、どちらかというと写實的に描かれています。多分、これは教育や経験に係っているのではないかと思いますが、アフリカでは本当の絵を描いているような感じがあります。

やはりいろいろ問題はあつて、教示や翻訳の問題などをこれから克服していかないといけないわけです。そもそも、今回やろうとして、「笑顔を描いて」と言ったときに、「では、「笑顔」はスワヒリ語で何と言えいいのだろう」というあたりから始まっているわけで、そういう問題は常にあります。

#41

先ほど、日本人・東洋人は目で表現するという話がありましたが、それでも本当はよく分からないなと最近は思っています。これは沖縄で撮った仮面の写真です。沖縄で撮った仮面は、やはり口で表しているわけです。目は動きづらいわけです。目はそんなに自由には動かないので、目の形というよりは目の周りの形が動くわけですが、口の方が自由度が高いので、仮面なども口で表現されているのです。

#42

ということ、表情の認識と表出について実際フィールドで調べてみると、いろいろとこ

れまでやってみないと絶対に分からないことが分かってくるわけです。これはすごく大事だと思います。もともとわれわれは、絵文字はきつと笑顔と思われるだろうと思ってやったのですが、そうではなくて、やはりやってみないと分からないことがたくさんあるなということが今のところの思いです。

表情以前に、もしかしたら顔の認識のスタイルが相当違う可能性はやはり捨てきれなくて、例えば眉毛から鼻のラインなど、われわれにとっては特に普段認識するものではないのですが、恐らくタンザニアやカメルーンの彼らにとっては、そのパーツはもしかしたら非常に重要な部分なのかもしれないというのが、実験だとかなかなかできないのですけれども、絵を描いてみるというアプローチによって表情認識の様式があぶり出せるかもしれないという思いがしています。

#43
44

トランスカルチャー状況において、多様性の意識化をしたり、受容をするということ、まさにアフリカに行つて表情の実験を試みるのは、一つの意識化の方法です。そのために何が必要なのかは単純で、とにかく異文化を知ろうとすることがまず大前提だと思います。とにかく知ろうとすること。

#45

昨日、領域会議があつて、その中で北山先生からコメントいただきました。アフリカについて「木を見る西洋人、森を見る東洋人」のような感じの異文化を理解する枠組みはできないかと宿題のような感じで言われて、これはちょっとまだできていませんが、ここに向かつてわれわれはやっていきますので、時間を下さい。

もう一つ、有益なコメントを頂きました。調査や研究について、現地の人、若者を研究者として育成して、彼らに調査、共同研究体制を築けないかというお話がありました。それについてわれわれが思うところがあり、タンザニアの子どもたちが今どういう状況に置かれているのか、少し紹介したいと思います。つまりこれが知ろうとすることです。

46
48

「実験心理学者、フィールドに行く タンザニアの子どもたち篇」ということで、タンザニアには日本からドバイ経由でダル・エス・サラームに行きます。

49
51

ダル・エス・サラームは極めて西洋的です。こんな感じの都市で、建物があり、車もあり、これがダル・エス・サラームの風景です。

52

これは市場です。

53

こんな感じのバーもあります。

54

その後、ダル・エス・サラームから奥地に入っていきます。

#55
58

そこまではボートで六時間ぐらいかけて、こういうボートに乗ってずっと奥まで行つて上陸です。上陸というか、湖を移動したわけです。

#59
60

島田さんがチンパンジー研究をやっていますが、チンパンジーの生息地はこんな感じの密林のようなところで、ただ、向こうの現地の人にはトングウェという人たちなのですから、彼らはこういう山の中を平気で歩き回って、われわれにはできない身体の使い方を恐らくして、平気で動き回っています。

#61

これはチンパンジーにたまたま遭遇してしまいました。チンパンジーが突然出てきたりするわけです。

#62
63

「村の子どもたち」ということで、子どもは普通にそこら中にいます。当たり前なのですが、ただ、こういう情景は最近、日本では見られないと思います。やはり公園などで遊んでいる子どもがいますし、子どもだけでこんな感じで遊んでいる風景というのは、なかなか日本では見られないと思います。

#64
65

私が行くと子どもがたくさん寄ってきます。子どもはすごく密接な関係性を築いてい

ます。

66

ここから本題です。子どもは働きます。後で報告しますが、非常によく働いています。これは親の手伝いなど、働いているわけです。

67
68

また、こんな感じで遊んでいます。遊びも、娯楽の道具があるわけではないので、自分たちで何か作って遊んでいます。これは遊びのエキスパートの島田さんから後で少しコメントいただきたいと思います。

69

このように何か見つけて遊んでいるわけです。だから、みんな基本的にすごく発明家です。

70
71

これはおままごとだと思のですが、周りにあるものを使って遊んでいます。こんな小さな子も遊んでいます。

72
73

これは小学校です。小さな子たちの教室で、机がなかったりするのです。もう少し大きくなると、机があるところをやっています。

#74

これは今、行った村よりもさらに奥の村です。ここは島田さんだけが行きました。

#75

これが小学校ですよ。

(島田) 幼稚園です。

(高橋) 幼稚園だそうです。

#76

こんな感じのところで、勉強なり教育を受けています。

少し動画をお見せします。子どもたちがどんな感じになっているか。

(動画)

こんな感じでみんな寄ってきます。子どもに囲まれてしまいます。

全部お見せする時間は多分ないので、見ていただきたいのは、これですね。これも同じように囲まれています。これは子どもなのです。子どもというのは、おんぶしている方も子どもです。おんぶされているのは、もっと小さな子です。こんな感じですよ。撮っているのは島田さんで、島田さんが撮っていることに気付くと、カメラに寄ってきます。

これは遊びの風景です。サッカーですが、ボールも自分たちの手づくりのものをを使って遊んでいます。大体、はだしです。こちらは湖で、子どもだけで遊んでいます。

目的のものはこれです。子どもが頭に何かのせてやっています。これは朝の風景ですが、基本的に働いているということです。

これは小学校に向かう風景です。みんなが頭に何かのせています。水道がないので、湖から水をくんで、みんな毎日頭に水をのせて行きます。

#78

社会の構造としては、村そのものが生活圏です。例えば村から電車に乗ってどこかに行くということは、子どもにとつてはほとんどないわけです。ずっと村の中にいるということですね。大体四〇〇〇人の村の中で一〇〇〇人ぐらいは子どもです。

私が見た限りでは男女分業です。女性は家事全般をしてすごく働いています。男性は、正直なところ、何をしているのかよく分かりませんでした。もちろん働いている人もいますが、普段何かしゃべっていたり遊んでいたりで、ちよつとよく分からなかったです。

相互扶助は当然で、必要なら見返りもなく、困っている人に手を貸します。ただ、日本人は無限に金を要求されることがあつたりします。

#79

小学校は、三〇年ぐらい前に日本のマハレ調査隊、つまりチンパンジの調査隊による援助で建てられました。一〇〇〇人ぐらいで、教師が一〇人ぐらいです。子どもは大人の言うことをよく聞きます。

小学校に行けない子も当然います。なぜ行けないかというと、家の手伝いをしないといけない。先ほど小さな子をおんぶしている子どもがいましたが、小さな子の面倒を見るのも子どもの役目だったりするわけです。授業はみっちりやります。中学校以上は村にはないので、

もし進学しようと思ったら、家を離れてどこか外に行かなければいけません。

#80

これがその社会において何を意味するかというと、労働力の損失なのです。要するに、どんなに小さな子どもでも、社会の中ではお手伝いではないわけです。純粹の意味で労働力として見なされています。それがいいことなのか、悪いことなのか、私はそれを評価する立場にはないし、そこについてコメントするつもりもありませんが、単に事実として、子どもはその社会において純粹な意味での労働力です。これをぜひ分かつていただきたいと思います。どんなに小さな子どもでも、小さな子の子守をするし、水くみも基本的に子どもの仕事だし、牛の放牧も子どもの仕事だったりします。

では、誰かをつかまえて教育を受けさせようというときに、それは多分、私はいいことなのだと思うのです。ただ、例えばその村にいる家族にとつては、学校教育に行くことは伝統的社会にとつての労働力の喪失を意味するわけです。

高等教育では、われわれは大学に行ったり高校に行ったりするわけですが、それはある意味、未来への投資であり、北山先生がおっしゃったことは、私もすぐ実現したくて、そのために何をしないといけないかというと、社会というものについての意識を変えていく必要があります。例えば有望な人を一人つかまえるということは、その家にとつての労働力の喪失であるということを、やはり強く考える必要があります。それが可能な社会になるのか、ならないのか分かりませんが、やはりそこまで考えてやる必要があると感じています。

錢さんから言われたのが、この状況は基本的にはカンボジアやラオスでも似たような部分があると。だから、これは別にアフリカに限ったことではなく、子どもが働いている世界、社会・文化・地域はいくらでもあるし、手伝いではなく、本当に純粹な意味での労働力とし

て家族に寄与している、労働力となっているという社会がたくさんあるということをここで言っておきたいと思います。

この後、島田さんから、昨日話せなかった部分で、同じく子どもの遊びというか、子どもはすごい天才であるというような話を少しだけします。

(島田) バトンタッチを受けました。高橋さんから、子どもは貴重な労働力であるというお話がありました。補足しておきます。正直なところ、子どもたちが労働を労働として捉えているかどうかというのは、またそれは別の問題でして、はっきり言えば、遊んでいる感じで働いているんですね。先ほどの子どもたちの笑顔を見れば分かると思いますが、彼らにとっては水くみも相当楽しい活動なのだと言えると思います。

トングウェとは別の民族ですが、牛追いなどをする少年たちは、牛を放牧してそこら辺にいるということが分かれれば、粘土をこねて、そこらにある泥を混ぜて、粘土細工をして遊んだりということは一般に見られることです。楽しくやっています。

#82

私はご紹介いただきましたけれども、霊長類学、今、紹介していただいたフィールドではチンパンジーの研究をしています。

#83

遊びの研究を常にやっており、今日少しだけお話しさせていただきたいのは、アフリカの同じ地域にトングウェという人間の集団と野生のチンパンジーの集団が同所的に暮らしていて、それであるが故に、私たち日本人のチンパンジーチームは、彼らにいろいろと助けても

らって、現地の調査を何十年にわたって進めてきたといういきさつがあります。

トングウェという人たちの助けを借りてやっているわけですが、そのうちに、だんだん彼らの能力、身体能力もそうですし、あるいは自然認識の深さは、今回 emoticon の実験でやったように、実は彼らの認知、顔の見方などが違うのではないかということに徐々に気が付いて、それを私一人では彼らに対して実験できませんから、高橋さんのような専門家を巻き込んで、できないかというのが初めだったわけです。

#86

遊びの話をしてほしいということなので、これだけお話ししたいと思います。現地に高橋さんと一緒に行って、何に一番驚いたかというところ、実は子どもたちの遊びをこれだけしっかりと観察できたことはなかったもので、彼らも、日本人が来ているということで、「ちょっと俺らこんなこともできるぜ」みたいな感じで、サービス精神を発揮していたのだと思います。

#87

私たちが七月のある日に、滞在中のインフォーマントの家から出て、「じゃあ、ちょっと暇だから酒でも飲みに行くか」と言って、昼間からお酒を飲みに出撃しました。そして、ふと見ると、家の前でこうやって集まって、子どもたちが土木工事的なことをやっているのです。それが三〇分後にはこうなって、さらに三〇分後にはこうなってというのを繰り返し、いつか、何と僕らが酒を飲んで帰ってくると、立派な小屋が出来上がっていました。その内部映像がこれです。

(動画)

非常に高度な模倣なのです。これは現地の人が応急に造ってしまつて、天井も拾つてきたやつで造つて、適当にやしの葉っぱを壁として造っています。レンガもどこから取つてきて、自分の足に落としてしまつて、今「いてえ(痛い)」とか言っていましたけれども。狭いですけれども、正直、普通に住めるといいますか、ニワトリなどを飼つておく部屋ぐらいには使えそうなものが、あつという間にできてしまつたのです。

ビデオでも出てきていますが、非常に組み合わせが見事なのです。一つ一つの材料を組み合わせるこの技法なども、トングウェの人たちが普段やつているやり方でできています。一〇歳ぐらいの子どもたちが中心になつてつくつた家です。大人の仕事の高度な模倣になっているということです。

チンパンジーの研究者として、一言だけコメントを加えておきたいのですけれども、私はトングウェの子どもたちの遊びの研究もやつていて、同時にチンパンジーの遊びの研究というものもやつているのですけれども、思うのは、チンパンジーはいろいろな遊び方があり、物を使つて遊ぶのですけれども、まさに、物と物を組み合わせて何かを作るといふのは、ヒトだけのものだという感じがします。

先ほどから高橋さんが見せてくれたビデオの中に出てくるおもちゃ類なども、全部組み合わせによつて作成されたものです。けれども、チンパンジーは、そういうことは実はしないということが、高橋さんと一緒に行ったことによつて、そういう発見ができました。そのことを付け加えておきたいと思います。

(高橋) ということとで、これでわれわれの発表を終わりにしたいと思います。おかげさまで着実に前進していて、来年、もしこの機会があれば「続々」ということで発表できるといい

なと思っています。時間が長くなりましたが、どうもありがとうございました。

(床呂) 高橋先生、島田先生、ありがとうございました。

高橋先生の表情認知に関するお話はいつ聞いても非常に刺激的で、アフリカにおける表情認知が非常に違うという研究成果が、アウトプットの部分も大変面白いのですけれども、今日のお話でも出てきましたけれども、そういう研究のアウトプットに至るまでのプロセスといますか、どのように現地でフィールドサイエンス系の方たちと実験系の方たちがコラボレーションをして、こういうアウトプットを出せたかというプロセスの部分を非常に興味深く伺いました。

それでは続きましてプログラムに従いまして、次は班としては、この科研の中では文化人類学班に所属ということですが、東日本国際大学の田中みわ子先生にお話しいただきたいと思います。

準備はよろしいでしょうか。では、よろしく願います。

「身体表現にみる眼差しのダイナミクス ―障害をめぐる文化的差異に着目して―

田中 みわ子（東日本国際大学健康福祉学部）

床呂先生、ご紹介いただきありがとうございます。東日本国際大学の田中みわ子です。では、はじめさせていただきます。

先ほどご紹介いただきましたように、私は文化人類学の班の中で、同じ班員でバリの人類学および芸能研究をしている吉田ゆか子さんと一緒に、共同研究を試みていく予定です。これまで、障害学という立場から身体表現について研究してまいりました。今日は、皆様のご発表では、事例やデータがとてたくさんご紹介されましたが、私の発表では、一つの事例に焦点を当てて、なぜ障害学という観点から文化的差異に着目した研究を行っていたのかということを中心にお話してまいりたいと思います。

そこで本発表では、障害学の視点に基づきながら、障害のある身体表現をめぐってどのような眼差しの相互作用がみられるのかを明らかにすることを目的とします。障害のある身体が、どのような表現を他の身体との関係において生み出しているのか、障害のある身体から生み出される意味が、どのようなかたちで社会とせめぎあい、経験と折り合いをつけているのか。それがいかなる身体性をもち、同時にいかなる可能性にひらかれていくのかを、文化的差異に着目して描き出してみたいと考えています。

発表の内容は、まず、障害学における眼差しの議論について概観します。次に、デイスアビリティ・アートと呼ばれる芸術実践の特徴と意義について簡単に紹介します。第三に、ここからが本日の話の中心になりますが、デイスアビリティ・アートの実践のなかからメア

リー・ダフィー (Mary Duffy) という女性の写真による身体表現を取り上げます。第四に、ダフィーの身体表現にみられる眼差しダイナミクスについて、障害学の先行研究に基づきながら考察を進め、最後に、バリでの調査に向けた展望を簡単に述べたいと思います。

#2

障害学において、障害のある顔や身体に向けられる「眼差し」がしばしば議論の焦点になってきた背景があります。障害のある身体の実験や表現に迫ろうとすると、これまで強調されてきたのはその否定的な側面でした。社会的に意味づけられるものとしての身体は、障害をみつめる他者の眼差しによって意味づけられ、その眼差しをみずからの内にいわば身体化することによって経験をかたちづくっています。障害のある身体の実験そのものが、既に社会的意味を含んだ眼差しのもとに形成されてきたということです。

たとえば、イギリス障害学の代表的研究者である、コリン・バーンズ (Colin Barnes) らは、障害の身体がいかに文化的にネガティブなものとして描き出されてきたのかということを描いています。障害学では、基本的にインペアメント (impairment) とデイスアビリティ (disability) という用語を分けて使っていますが、バーンズは、あらゆる文化が「身体の損傷、インペアメント (impairment) に本質的に否定的な仕方、応じることを意味してしまっている」と批判し、身体の差異や損傷に対するそうした否定的な反応は、普遍的でも必然的でもなく、あらゆる社会や文化に、一様にみられるわけではないと主張しています。問題なのはむしろ、障害を個人の身に起こる悲劇とみなす「個人的悲劇モデル」に基づいたイメージが、障害者の多様性を認めていないということであり、社会がそうしたイメージを身体に課してきたということです。

#3

障害のある身体への眼差しは、様々な文化に深く根差したものであり、どのように障害を文化的に意味づけてきたのかを浮き彫りにするものです。たとえば、イギリスの障害学研究者であるトム・シェークスピア (Tom Shakespeare) は、人文学における「沈黙の身体」(R・マーフイー)、「スティグマ」(E・ゴッフマン)、「おぞましきもの (abject)」(J・バトラー) などの概念を参照しながら、障害の身体は「否認したいもののゴミ箱」となっていると述べています。

ここで問題となるのは、身体の損傷 (インペアメント) に対する文化的態度です。その文化的態度とは、抑圧・差別・偏見などであり、これらの態度は、歴史的に、文化的に、そして西洋の価値体系の中に深く埋め込まれてきたということです。このように、障害のある身体を「規範的な身体」からの逸脱、あるいはスティグマ (烙印) を付与されたとみなす眼差しは、既に社会的意味を含み込んでいます。

アメリカの障害学研究者のローズマリー・ガーランド・トムソン (Rosemarie Garland-Thomson) は、眼差しが、見る者と見られる者との間に社会関係を打ち立てることを論じています。障害のある身体は常に「見られる側」として捉えられてきたわけですが、眼差しは、社会関係が織り込まれていると同時に、社会関係をつくり出していくものです。

それゆえ、障害学をはじめ、障害のある当事者自身が主体的に生み出してきた実践は、既存の文化的価値観に対するある種の「異議申し立て」であり、「新たな価値観の創出」と捉えられてきました。とりわけ、次に述べる、イギリス、アメリカを中心に展開してきたディスアビリティ・アートと呼ばれる芸術実践は、障害のある身体に対する否定的な眼差しが、西洋の価値体系の中に埋め込まれてきたこと自体を問題として提起し、新たな表現形式を追求してきました。

また、日本国内においても、当事者の経験に基づいた表現を提示しようとする芸術および日常的な取り組みや実践が多くみられます。「顔身体学」にひきつけていえば、こうした取り組みは、相互行為場面において生じる「当惑」や「眼をそらす」といった否定的な感情や反応に対して、障害のある人々がどのように折り合いをつけているのかということの表れでもあります。こうした日常生活を生き抜くうえでの戦略は、障害のある身体に注がれる社会的な眼差しに対する一種のパフォーマンスとしても捉えられ、障害のある身体が積極的な意味の生成者となり、その社会的な役割をも変えていく「政治的戦略」となっています。

以上のことから、芸術であれ、日常であれ、障害のある身体のパフォーマンスは、社会的規範や価値観を維持し、攪乱し、転覆させる役割を果たすものであり、そうした機能が着目されてきたといえます。

4

障害学およびデイスアビリティ・アートの実践は、今述べたような、障害のある身体を否定的に意味づける眼差しを問題として提起し、新たな表現形式を追求してきました。そこで次に、デイスアビリティ・アートの実践の特徴と意義について簡単に述べます。

イギリス、アメリカを中心とするデイスアビリティ・アートは、絵画・音楽・ダンス・演劇・詩などあらゆるジャンルにわたる総合的な芸術であり、障害の経験を反映していることを核とする芸術活動や作品のほか、障害のある人々が芸術に参加したり、鑑賞者として芸術を享受したりする文化的営為を含んでいます。そのようなデイスアビリティ・アートは、障害の社会的、文化的意味に挑戦し、障害のない人々による文化的表象の形態を批判する実践であり、障害文化の可能性として位置づけられました。デイスアビリティ・アートはまた、障害にまつわる社会的文化的意味の変容をもたらすものであると主張されています。

このようなデイスアビリティ・アートの実践には、障害を個人的な悲劇と捉える見方、障害の個人的悲劇モデルではなく、差異や損傷をもつ身体を誇り（プライド）として捉え直し、いわばポジティブな見方やイメージを生み出す障害の「アフーマティヴ・モデル」の主張がみられます。そのプロセスにおいては、受動的なイメージではなく、積極的な意味を生成する者として、文化的表象や障害文化の創造に、障害のある人自身が関わることが重要な意味をもっていました。

#5

たとえば、少し昔の作品になるのですが、このスライドの作品は、目の見えないアーティストの方が描いた自画像です。見えない身体を見えるということがテーマであるこの作品は、雑誌に掲載されたものの、今では所蔵が分からなくなってしまった作品です。この作品に描かれているような力強さと美のイメージは、デイスアビリティ・アートにおける障害のある人たちのもつアフーマティヴなイメージを象徴するものとして、その実践や運動の当初において賞賛を集めたのです。こうした動きが、いかに現在のイギリスの障害のある身体イメージに影響を及ぼしているのかということも、想像していただければと思います。

#6

デイスアビリティ・アートは、美的であると同時に、政治的な努力というかたちで展開されてきましたが、それを示している二つの文章を引用します。

デイスアビリティ・アートはそれゆえ、潜在的に教育的で、変容的で、表出的で、感情的に説明的で、参加的で、関係的なものである。それは文化的行動のひとつの概念で

#5

Gioya Steinke, Viva (1993).
サイズ、所蔵不明[DAM(1993),3(2), p.43より転載]



ある。「中略」それは「意味のポリティクス」を称賛し、そうすることにおいて転覆的な表象やパフォーマン스가、差別的なバリアや態度を打倒することができると考えられるのである。(Barnes, C., G. Mercer and T. Shakespeare, 1999, *Exploring Disability: A Sociological Introduction*. Cambridge: Polity, pp. 206–207 より引用)

#7

デイスアビリティ・アートは障害のある個々人に、メインストリートのステレオタイプに対抗する身体の損傷についての自分自身の見方や経験を表現する機会を与える。しかしながら、デイスアビリティ・アートの中心的な特徴は、集団的な（共通の）経験である。(Swain, J., S. French and C. Cameron, 2003, *Controversial Issues in a Disabling Society*. Buckingham: Open University Press, p. 72 より引用)

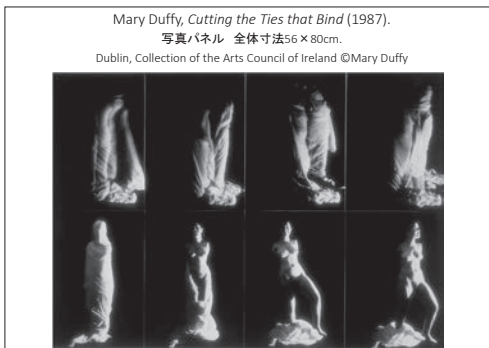
引用終わります。個々人に異なる障害の経験において、デイスアビリティ・アートは、そこに共通する何らかの経験を描き出すことを狙いとしているということになります。

以上をふまえ、デイスアビリティ・アートの一つの事例に焦点を当てて、そこにどのような眼差しのダイナミクスが生じているのかを次に考察していきます。

#8

スライドをご覧ください。暗闇の中に白い光が当てられて、ぼんやりとした輪郭で現れる像は、かの有名なミロのヴィーナスをすぐさま思い起こさせます。じっと目を凝らして見ると、ヴィーナスのトルソーそのものの輪郭をしたその姿が、女性の、腕のない、生身の身体であることが分かります。

#8



#9

この静止した一瞬の姿が印象的な写真によるパフォーマンスは、アイルランドのアーティストであるメアリー・ダフィー（一九六一年生まれ）による《締めつける束縛を断つ》と題した八枚の写真パネルの中の一枚です。この作品は、一九八七年七月、アイルランド芸術協会主催による展覧会のためになされたものです。

このダフィーの写真による身体表現を本日取り上げるのは、この作品がデイスアビリティ・アートのもつとも初期のものであり、これまでフェミニスト・アートおよびデイスアビリティ・アートの文脈において、それらを象徴するパフォーマンスとしてこれまで紹介されてきたからです。主に身体の規範や眼差しの問題と結びつけて論じられてきたという理由もあります。

#10

ダフィーのこの写真は一連の身体物語であり、八枚のパネル写真からなる一つの物語をなしています。それは、暗闇の中で白い布をまとった身体からはじまる物語です。

もう少し詳細にみてみますと、写真の一枚目から四枚目、白い布のようなものと影のような身体が写真の中で揺れています。白い布と身体の振動のみが見える写真は、明確な輪郭をもたず、ただ揺れ動きながら、形のない身体を白い布が捕らえていきます。

五枚目の写真になると、動きが止まり、その布で完全に覆われた身体、あるいはここではまだミイラを模った白い物体が、くつきりとした輪郭をもつて現れます。六枚目、その覆い尽くしている白い布を脱ぎ去ってあらわになるのが、先ほど言及したミロのヴィーナスの姿をしたダフィー自身です。そして、そのヴィーナスは次の七枚目の写真の中で、微笑んで歩み出そうとしており、最後の写真では、光の方向へと力強く踏み出しています。

「締めつける束縛を断つ」というタイトルが示すように、ここで白い布の覆いそのものが、強力なメタファーとなつています。ダフィーは、この作品のパフォーマンスの冒頭において、自分自身を固定し、嵌め込む壁をみずから築いています。それは、ダフィー自身の言葉によれば、「自分に不快な知識から身を守るため」の、自分自身を防御するための壁であり、同時にみずからを束縛してきた壁なのだといえます。

形をなさず揺れている身体は、覆いによつて形をなさうとしながら、そこに封じ込められています。固定され、束縛されて、形を与えられた身体は、しかし、その白い布の覆いだけがくつきりと浮かび上がる物体なのでした。境界をなすのは、身体というよりも、むしろ覆いなのです。この覆いが、ダフィーを取り囲み、包囲するものとして、幾重にも巻きつけられ、厚みを帯びたメタファーとして機能しています。覆いは、その覆いが包囲している身体が、覆いなしには形をもたないものであることの印となつて、ダフィーの身体を統制されないものとして追いやりながら縛りつけています。

ダフィーの言葉をふまえて言えば、この覆い（壁）は、まさに医学的・社会的出会いの場において形成されたものであることを示唆するものですが、ダフィーにとつては現実に感覚されているのであり、まさにこの覆いこそ、社会的規範、医学的知識、正常性の概念、女性の理想像、伝統的なステレオタイプ、人々の社会的な眼差しなどを含み込むものであり、それらは障害学が「社会的抑圧」と名指して問題としたものです。

ダフィーのパフォーマンスは、ミロのヴィーナスの姿に白い光が当てられるのとまさに同じように、その静止した一瞬のポーズが放つ効果に光が当てられました。なぜなら「脅威的」だとみなされた身体がヴィーナスになることによって、障害のない鑑賞者へと差し出され、そうして静かにたたずむ身体が、「文化的、美学的規範や、それが意味する価値観や判断に観客を向き合わせる」からです。ダフィーの身体そのものが、ヴィーナスのイメージ

を通して、沈黙したまま鑑賞者に見つめることを要求するのです。この沈黙の中にあるダイナミクスを次にみていきたいと思います。

#11

ヴィーナスの姿を思い起こさせるダフィーの身体に、見つめる者の眼差しはひきつけられて戸惑いを感じます。彼女はあるテキストに次のように書いています。引用します。「私の剥き出しの身体、その柔らかさ、その丸み、私が制御しなかった脅威を、人々に突きつけることによって、障害のある女性がたいてい悲劇的で、いつも哀れだというメディア表象のバランスを取り戻す。私はかつて私を裸にさせたすべての人々……剥き出しの眼差しをもった一般の人々や、とりわけ医療の専門家に、鏡をかざしたかったのだ」と。

#12

鏡をかざすダフィーは、眼差しを要請します。先のガーランド・トムソンの言葉を借りれば、この鏡は見つめる者の眼差しを二重に分裂させて、「二つの対立する眼差しのモードのダイナミクス」を生じさせることになります。ガーランド・トムソンによれば、障害の身体は眼差しを要請し、その眼差しは物語、つまり「あなたが起こったのか (What happened to you?)」という問いを喚起します。ガーランド・トムソンが言及しているように、パフォーマンス・アートは、見つめる者と障害のある対象との間の交流において、そうした眼差しと語りのダイナミクスを操作するものと考えられます。

ガーランド・トムソンが述べた「二つの対立する眼差しのモード」とは、ダフィーのパフォーマンスに「奇妙に異なる身体を凝視すること」と「美しい芸術作品としての女性の身体、古典的な女性の美のイメージを見つめること」、この二つです。このような二つのモー

ドは、主にパフォーマンス・アートにおいて、障害の身体に生じる二つの眼差しの経験の形態です。

たとえば、一時的に障害をもった経験をもつダンサーであり、パフォーマンス理論の研究者でもあるオルブライト (A. C. Albright) は、舞台上でパフォーマンスをする障害の身体に、観客は「二重の視線」を向けてしまうと述べています。「二重の視線」とは、舞台上のパフォーマンスそのものと、身体を抱えている現実、つまり損傷の両方を重ねて見てしまうことを意味しています。また、別の論者の視点を合わせると、二重の視線の向かう先である障害のあるパフォーマンスの身体は、既に、「諸刃の剣」をもつことになります。

つまり、パフォーマンスの身体は、一方で、肉体的な対象としての身体、身体そのものを提示し、他方で、メタファーとして、一連の経験あるいは存在の仕方を示す表象的なシステムとしての役割をするのです。「表象的なシステム」とは、身体の損傷そのものではなく、その損傷に対する文化的反応を核とするものを意味しています。パフォーマンスにおいて障害に特有の問題は、このような二つのモードです。腕をもたないヴィーナスとダフィーの類似性によって、この二つのモードはより一層明瞭になります。ダフィー自身が、鑑賞者の眼差しにおいて、この二つのモードを積極的に衝突させているからです。

ミロのヴィーナスは、西洋における伝統的な美の理想であると同時に、それ自身が腕のない、切断された芸術作品であるという点において特別な位置を占めてきました。一方、ダフィーの身体は、美の対極に置かれてきたことになりましたが、それ自体が全体として存在する生身の身体であるという意味において、ヴィーナスと奇妙な相関関係がみられます。

#13

障害学研究者のレナード・デイヴィスが、ダフィーとヴィーナスについて、なぜ一方が魯

威や哀れみの対象となるのに対して、他方は美しいと受け止められているのかと問うとき、彼は、ミロのヴィーナスと障害のある女性とを同時に議論の俎上にのせる自由があることを主張しています。ディヴィスは、「障害者についての『問題』はあまりにも長い間、障害をもつ人々の足元に置きつ放しにされてきた」と述べています。ディヴィスは、ダフィーのパフォーマンスにヴィーナスと神話上対極に位置するメドゥーサのイメージを重ね合わせて、どちらも双方の存在なしには規定されない二重の存在であることが重要なのだと述べています。

メドゥーサはご存知の方も多いと思いますが、ギリシャ神話に登場する恐ろしい外見をもつて、人を石に変える力をもつ怪物です。ここでいう二重の存在とは、美の理想としてのヴィーナスは、腕がないことによって美の規範から逸脱していますが、脅威の対象として美の規範から逸脱しているメドゥーサは、かつては美しい女性であったことを意味します。

ヴィーナスとメドゥーサが、どちらもその一方のイメージなくては存在できないという点で、その二重性が、ダフィーの身体において交錯しているのですが、ディヴィスはそれをダフィーの身体そのものというよりもむしろ、そうした二重性を見出し、付与してしまう、いわゆる「正常」な眼差しの危険性が問題であるということを示唆しています。

ダフィーは、自分を裸にさせたと同時に、彼女を包囲し、彼女に覆いを築かせた剥き出しの眼差しを「鏡をかざす」身体によって撥ね返し、二つの眼差しのモードを、見つめる者との間に、見つめる眼差しの中に生み出しています。したがって、この二つのモードが同時に生じる場には、「見つめる者と障害の身体のダイナミックな交流」があるといえます。けれども、ダフィーのヴィーナスを見つめる者は、みずからの二つの眼差しのモードにむしろ立ちずくんでしまいます。

二つの眼差しのモードの沈黙した交流には、ある「中断」が生じています。この中断とは、

見る者の「視覚の場の崩壊」によって秩序の感覚が打ち砕かれてしまうという状況です。この中断には、障害の身体との出会いの瞬間の様相が、前景化していると考えられます。しかもこの前景化は、見る者の事物の秩序の感覚までも打ち砕いています。

二つのモードは、視覚の場と秩序の感覚の崩壊を伴うのです。大抵の場合、このような危機は意識下に封じ込められて、ばらばらになった感覚やその崩壊を回復しようと調整する力が働きます。デイヴィスによればその顕著な例は、美術史家となります。美術史家は、身体の切斷ないし不在を見ないという埋め合わせを行います。美術史の専門家は、ミロのヴィーナスの失われた腕を想像するというように、一方で幻影肢を想像しながら、他方で断片的な部分部分を分析するという二重の行為を行い、その損傷と視覚の場の崩壊を回復しようとします。つまり、幻影肢の想像によって美術史家は、視覚の場を変形し、知覚の破壊を調整したりするのです。

こうした不在を見ないという美術史家の見方、つまり身体の全体を想像することによって、損傷を回復する見方をダフィーは毅然として拒否しています。ダフィーの身体の全体を、眼差しを通してつくりあげてしまうことは、究極的には、ダフィー自身が拒否していた「人工の腕」をダフィーに強いてしまう営みとなります。ダフィーは白い布の覆いが表していたように、全体を創りあげてしまい、視覚の場の崩壊を調整してしまうことに対しては、静かに怒りを込めています。なぜなら、そのような見方は、彼女自身が自己定義する身体イメージや完全さの感覚を無視してしまうからです。

ダフィーの腕の痕跡ともいえる肩の丸みは、断片化を拒否して、全体として、幻影肢に頼らずに、存在しようとしています。みずからをそう定義するダフィーは、眼差しの対象でありつつ、眼差しを要請しつつ、その所有から逃れようとしています。完全には逃れられないという問題もありますが、腕の部位の損傷について、部分化ないし断片化も全体化も拒否す

る身振りは、視覚の場の崩壊を引き起こし、見る者の秩序の感覚をばらばらに打ち砕き、そうして何とかして眼差しの所有から逃れることによって、みずからの身体を自分のものにするのです。ダフィーは、いわば視覚の場の崩壊を積極的にもたらすことによって、見る者の眼差しを操作し、そうすることによって、見る者の眼差しを変容させようと、希望を託しているように思われます。

ダフィーは、他の身体との関係においてではなく、外部からの眼差しによるのでもなく、みずからの身体の内ミロのヴィーナスの姿を重ね合わせることによって、自分自身の経験をつくりあげていくのだと考えられます。これは、ダフィーの言葉を借りていえば、美しいものとして「完結した、完全な身体」の提示であり、そういうかたちで自らの姿を表現したのです。ダフィーが託した希望というのは、障害のある身体に対する眼差しの変容であり、身体の感受性そのものの変容なのかもしれません。

最後にまとめます。規範的な身体とは何か、美の規範とは何か、つまり、何が普通で美しいとみなされるのかということが、時代や文化によって変容するものだとなれば、ダフィーの試みは、まさに西洋の文化的文脈があるからこそ、その文脈そのものに働きかけることが可能となっているのだとも考えられます。表現の仕方も、その受け止め方もその文脈によって規定されることをふまえると、では、異なる社会的・文化的文脈のもとでは、どのような眼差しの相互作用がみられるのか、そのことを考察していくことが今後の課題となります。

床呂郁哉先生を代表とする計画班「顔と身体表現の文化フィールドワーク研究」では、班員の吉田ゆか子さんとの共同研究として、バリ島でのフィールドワークを行う予定です。これまでの吉田さんとの調査から、西洋的な障害概念とは異なるバリ特有の身体観や表現の様相がみられ、そこから眼差しの相互作用を読み解いていきたいと考えています。

#14

以上で発表をおわります。引用参考文献はスライドの通りです。ご清聴ありがとうございます。ありがとうございました。

（床呂） 田中さん、どうもありがとうございました。

今のお話は、科研全体のテーマの中で引き付けて申しますと、山口先生の冒頭のご説明の中にもあったと思いますけれども、われわれのこの新たな新領域の中で、一つは、新たな価値観の提出、それからその多様性の受容ということを掲げています。多様性や異文化を受容していくという中で、一つはもちろん西洋文化と日本文化、あるいはアフリカ、タンザニアというような空間化された文化の問題というのは一つあると思いますけれども、もう一つは、渡邊先生も言及されましたけれども、聾文化（デフカルチャー）ですとか、あるいは今まさにテーマとなった障害文化と、どういうふうにとランスカルチャー状況の中で取り込んでいくか、考えていくかということにもつながるかと思います。どうもありがとうございます。しました。

それで、プログラムの際には小手川先生たちのご発表ということになりますが、若干中身の濃い発表が続いたということで、五分間いったんブレークを入れさせていただければと思います。よろしいでしょうか。ですので、四時四〇分にこちらの会場までお戻りください。

——休憩——

（床呂） よろしいでしょうか。再開の予定時間になりましたので、ご発表としては最後のお話ということになりますが、この科研では冒頭の説明でもありましたように心理学系、文化

Ⅱ 報告

人類学系と並びまして、哲学、特に現象学を中心とする哲学的なアプローチというのも一つの大きな柱になっております。最後は哲学、特に現象学の立場からのお話ということで、國學院大學の小手川先生、立教大学の國領先生、お二人のお話ということでよろしいでしょうか。

それでは、準備がよろしければよろしくお願いします。

「顔身体の現象学―概要と展望」

小手川 正二郎（國學院大学文学部）

國領 佳樹（立教大学文学部）

（小手川） どうもありがとうございます。ただ今、ご紹介にあずかりました國學院大学の小手川と申します。

われわれは哲学班ということで哲学的視点から顔身体にアプローチしていくという形になるわけですが、最初に山口先生からご紹介がありました。が、一二月二三日に哲学カフェをやりますので、ぜひお気軽にいらしていただけたらなと思います。

それから、先ほど配布されたと思うのですが一月二〇日と二一日にも金沢で哲学カフェをやりますので、ぜひこちらも時間に余裕のある方はいらしていただけたらと思います。こういう社会への発信ということももちろんやるのですが、われわれは哲学という視点から顔身体 of 現象学に取り組む予定でして、今日は前半で私がその概要をご紹介して、そして後半で國領先生から今後の課題と展望をもう少し具体的な形でご紹介したいと思っています。

#2

まず最初に、現象学と言われても何のことやらという方もおられると思います。現象学というのは哲学の一潮流で、フッサールという人を祖とする思想潮流です。非常に雑ぱくに言う、「事象そのものへ」ということをモットーにしております。事象というのは事柄そのもののへということ。何か特定の思想的な立場から論じるのではなくて、われわれの経験に基づいて、さまざまな現象、例えば知覚や錯覚や幻想、あるいは感情、身体性、他人と



の関係、そういうものをわれわれが経験しているがままに記述し、分析するという方法を取ります。

#3

その「われわれが経験しているままに」ということなのですが、経験している人の視点からということになります。要するに、経験が持つている一人称的な特徴というのを重視して、それを考えていくのです。これだけだと分かりにくいと思うので、もう少し具体的に説明すると、例えば「怒りを感じる」場合について考えてみましょう。多分、怒りを感じたことは皆さんあると思うのですが、怒りを感じるときに、生理学的説明としては、脳の扁桃体に脅威が与えられて、ストレス反応が起こって、発汗作用などが起こるといふ説明も与えられます。これはいわゆる三人称的な観点、観察者の観点からの怒りの説明ということになります。

#4

現象学がやるのは、そういう三人称的な観点からの説明ではなくて、あくまで怒りを感じている人の視点から、怒りというのはどのように体験されているのかということを書述して分析していきます。

例えば、授業中に携帯を見ている学生に怒る。これは私の実体験なのですが、そういうことがあつて、こういうときに、この怒りはどのように体験されているのかと分析するときに、いろいろな観点があります。例えば怒りというのはどういう対象に向けられているのかという観点から見ると、人に対して向けられる怒りもありますし、自動販売機でお釣りが出てこなかったということで、自動販売機に対して怒るといふこともあると思うので、事物に対し

て怒るということもあります。

あるいは、人に対して怒るという場合も、授業中なのに携帯を堂々と見ているというその人の「性格」に対して怒っているのか、あるいは携帯を見ているという「行為」に対して怒っているのかということで、随分怒りの性質も変わってきます。

あるいは、その怒りという感情が正しい信念に基づいているのかという分析も可能です。ここで信念というのは、説明が必要なのですが、これはちよつと哲学的に特殊な用語なのですが、普通に「信念」という言葉を日本語で使うと、どうしても信仰心、固く信じる心というようなことを考えやすいのですが、そうではなくて、ここではあくまで何か行動をしているときに前提となつている、想定していることを意味しています。例えば、私が携帯を見ている学生に怒っている場合は、携帯でゲームをしているのではないかと言うことに対して怒っているなら、「携帯でゲームをしている」という信念があつて、それで怒っていると考えられます。

#5

こういう経験をどういうふうに特徴付けていくかというときに、大きく分けて二つやり方があります。ちなみに、こういうことについては最近出た『ワードマップ 現代現象学』という本があり、これに書かれていることに基本的に沿つて説明するのですが、これは私の先輩たちが書いていまして、「宣伝してこい」と言われたので宣伝しておきます。

二つ、大体、経験に特徴があります。一つは内在的特徴というもので、それは経験それ自体に含まれている特徴ということです。内在的特徴という方は、例えば視覚経験の場合、われわれが何かものを見る場合はものの全体を一挙に見ることができない、そういう特徴を持っています。これは当たり前のことなのですが、こういう形で経験それ自体に含まれてい

る特徴を抽出できます。

#6

あるいは、ある経験が別の種類の経験とどういう関係を持っているのかを分析することもできます。これは「関係的特徴」と言われるもののなのですが、例えば信念という経験と知覚という別種の経験がどういう関係にあるかということを考えるときに、信念が知覚の動機となる場合があります。

先ほどの例ですと「携帯でゲームをしている」という信念を持ったら、私はそれを実際に確かめに、学生のそばに行き、実際に見る、そういう知覚をします。あるいは、信念が知覚によって確認されたり裏切られたりする場合もあります。「携帯でゲームをしている」という信念を持って見てみると、実際に「していた」場合、信念が確認されます。逆に、実はゲームをしていたのではなくて、授業に関することを調べていた。そういう場合もあって、そうすると私の信念が裏切られて「私は間違った信念の下で怒りを感じていた」ということで、怒りも消えるということになります。これも私の実体験なのですが、スマホで授業に関することを真面目に調べている学生も増えているので、そんなに簡単に怒ったりはできないのです。

#7

知覚経験の内在的特徴をいろいろ考えてみますと、今、最初に触れたものの一つの側面しか見えないという特徴、これは「射影構造」というのですが、あるいはあくまで知覚というのは何かを向こうから受け取るという受容的経験だということです。これは当たり前のことなのですが、例えば想像という別の経験でしたら、想像されるものというのは自分の頭の中

で考えて、自分で生み出したりするものなので、知覚とは違う、受容的ではないということが言えます。

あるいは、注意の変更可能性というのは、視覚経験というのは基本的に向こうから生じてくるものなのですが、そのどこに自分の注意をフォーカスするかというのは、こちらの裁量に委ねられますので、そういう意味では、自分で注意をいろいろなところに向けることができるという特徴を持っています。

#8

関係的特徴の方で言うと、視覚経験というのは、これも当たり前のことなのですが、体の一部を動かすことで見える範囲が変化したり、見える側面が変わってきますので、そういう身体運動と連動しています。あるいは、われわれの知覚は、以前の、過去の知覚というものの経験に基づくことが多いので、以前の知覚の先取りを含んでいて、一つの側面しか見えない場合でも、われわれは過去の経験に基づいてその背面などを先取りしているということが言えます。

#9

おおまかに言って、以上が現象学の分析のやり方なのですが、ここから顔身体の現象学ということ、どういうことをしたいのかの説明に入ります。

顔身体というときに、自分の顔身体をどういうふうに体験しているか、あとは他人の顔身体というのは、どういうふうに体験しているか。そういう二つの観点が考えられます。自分の顔身体の場合は、例えば自分の体は、体を動かすことによって自分の体を体験するという場合もありますし、あるいは、他人に見られることによって「見られる私」としての顔身体

を感じる場合があります。

#10

逆に他人の顔身体の場合は、われわれが日常的に対人関係において他人の顔と身体をどういうふうに知覚しているかを分析することがあります。他人の顔身体を見分ける一つの要素となり得るものとしては、例えば性差、人種、あるいは美の規範というものが考えられます。

#11

そこで顔身体の現象学をより考えていくと、自分の顔身体の認識と他人の顔身体の認識が切り離せないということを、フランツ・ファノン (Frantz Fanon) というフランスの旧植民地出身で、フランス人としての教育を受けた思想家がいるのですが、彼が自分の差別体験に基づいて述べています。

なぜこういうことが言えるかというと、他人の顔身体のどういう特徴に目を付けるか、あるいはそれをどういうふうに理解するかということから、他人に対する対応と応答が規定されているわけですが、そうした経験がだんだん個人のうちに蓄積されていくと、自分の体や自分の顔というものを、どういうふうに感覚したり、認識しているかということが形成されていきます。これは直前の田中先生のご発表にありましたけれども、障害者の経験にも当てはまることではないかなと思います。

#12

その顔身体の現象学を具体的に考えていくと、特にトランスカルチャー状況下における面で顔身体の現象学をどう考えていくかという一つの方法としてこういうものが考えられ

て、社会における顔身体に関するさまざまな意味付け、それはポジティブな意味付けであったり、ネガティブな意味付けであったりするわけですが、そういうものを通じてわれわれ個人の経験がいかに規定されているのかを分析します。

その結果として、またその個人がどういうふうに関身体をめぐる感情や知識を得ているかということを書述し、分析していきます。これは、主体の個人的経験というものは、顔身体に関する文化的・歴史的価値観にも影響されているわけですが、同時に、先ほど田中先生のご発表でもありましたが、そういう個人的経験が、また新しい文化を形づくったり、あるいは旧来の価値観を問い直したりする可能性もありますので、そういうことも含めて分析していく可能性があるのではないかと思います。

#13
14

そこで問題になってくるのが、顔身体 of 知覚は自然な体験だと言えるのかということ、この会場におられる方は恐らくもう何度も、幾つもの発表の中で、自然な体験とは言えないということ、非常に緻密に研究されている方が多いとは思いますが、なぜかという文化・歴史的価値観やバイアスが、われわれの体験の仕方に非常に深く浸透している可能性がある。例えばある顔身体を美しいと感じる場合、どういう美の価値観や美の規範がある社会で共有されているのかというのは、やはり非常に大きな影響力を持っています。あるいは、ある顔身体は危険だ、怪しいと感じるのも同じようなことが言えます。

これは特に障害者の方の経験を考えると、障害者の方は自分の顔身体を健常者から「かわいそう」という形で見られ続けることで、そういう価値観の下で自己形成する場合もあるということです。これはまさに、一番最初に山口先生が異文化に対する意識下の危機感、抵抗感ということを主題とされているとおっしゃっていましたが、そういうことにも通じる論点

なのかなと思います。

#15

そこでわれわれがこれから考えていきたいのは、人種の現象学というものなのですが、これは特に移民問題が非常に切実な問題としてある北米などで研究が進んでいる分野なのですが、人種というのはどういうふうにわれわれに体験されているのかということです。

特に、私個人的にはアジア系の人種として、われわれがどう知覚され、なおかつ自分のことを自己認識しているかということに関心があります。そして、そこに含まれるさまざまなバイアスや、そういう知覚に伴われて生じる評価的態度、これはポジティブな態度やネガティブな態度、これを美しいと感じたり、美しくないと感じたりという態度、あるいはさまざまな感情です。

これもよく出される例ですが、ニューヨーク在住の白人の女性が深夜に黒人とすれ違ったときに恐怖を感じます。これは白人女性に言わせると「自然な恐怖なのだ」ということです。が、果たしてこれが本当に自然な経験と言えるのかというようなことを考えていきたい。そして、こういう具体的な問題を考えていくときに、どのようなアプローチが可能かをこれから、後半の國領さんから、紹介していただきたいと思います。

では、よろしく願います。

(國領) 國領です。よろしく願います。

#16

具体的なアプローチを紹介するというよりは、内容としては、今回私がお話するのは顔

身体の知覚に関わる現象学的な立場からの問題を設定し直すことです。とりわけ、他人の顔知覚と、他の心的状態との関係についての考察と、それに伴う倫理的問題というのを皆さんと一緒に確認して、共有できたらいいなと思っております。

#17

示したいことは、ある常識的な見解に従うと、顔身体の知覚経験が人種差別的行為の一部に合理的な根拠を与えてしまうように見えるケースがあるということです。このケースというのは、トランスカルチャー状況下における顔身体学が関わるべき倫理的問題なのではないかということを提起したいと思います。

では、ある常識的な見解というのは何なのかということを説明したいと思います。

#18

これについては唐突なのですが、皆さんと一緒に現象学的探求らしきものを、先ほど小手川先生が説明した関係的特徴から、経験についてわれわれの直感を確認しましょう。

まず、皆さん、自宅の冷蔵庫の中にトマトが入っていると想像してください。そして次のように「なぜ、冷蔵庫にトマトが入っているの？」と質問されたと考えてください。今から三つ、それに対して理由を述べます。自分がそれぞれその理由を述べたと想像してください。一つ目は「冷蔵庫にトマトがあったらいいなと思っていたからだよ」。これは希望的観測や欲求に基づいて信念が形成されているパターンです。

#19

もう一つは「トマトが入っていない冷蔵庫なんて冷蔵庫ではないからだ」と。これはいわ

ゆる偏見、かなり奇妙な偏見ですが、それに基づいている信念です。

#20

最後は知覚に基づいた場合です。「さっき冷蔵庫を開けたときにトマトが見えたから」という場合です。

#21

さて、この三つ、それぞれ自分で答えたとしましょう。どれがもっともらしいというか、良い理由として感じられるか。恐らく皆さん全員、Cだと答えると思います。先ほど冷蔵庫を実際見たから、冷蔵庫の中にトマトがあるという信念を抱いたのだと。こういう関係がある場合、私は合理的な根拠を持っていると言ってもいい。皆さん自身が今、やってみて「そのとおりだな」と思ったのであれば、一応、信念を合理的な仕方で根拠づけると言っているのです。つまり、かくかくしかじかであるように見えるのであれば、かくかくしかじかであると信じることは合理的な根拠を持つ、良い理由をちゃんと持っている状態だと言えます。

#22

これ以外に私が常識的な見解と言いたいもう一つのは、知覚経験それ自体は合理性の評価対象ではないということです。信念の場合は、それについて根拠を問われた場合、その根拠の内容によって、それは良い根拠で抱いたのか、悪い根拠で抱いたのかが評価の対象になると思うのですが、見えることについて「なぜそう見えているのですか」と言われたときに、良いも悪いも理由はないでしょう。実際にトマトはそこにあるからだ、普通の場合だったと言うしかない。

#23

では、こういう常識的な見解が、どのように人種差別と関わるのでしょうか。

#24

それを理解するために、“The Hate U Give” という最近出た小説の一部から考えてみましょう。これは一六歳の黒人の少女、スター・カーターがある事件に巻き込まれて、いろいろ自分のことを考えだす、人種についていろいろ考えていくというストーリーです。これを読みます。

「私が一二歳になったとき、父親は私に二つの重要な話をした。一つは、ふつうの性についての話。もう一は、警官に止められたときにどうすべきか、ということ」。日本にいる場合、こんなことを親に教わることはないと思います。性についてはあるかもしれませんが。

そして具体的に次のように注意を受けます。「スターよ、スター。警官が何を言っても、そのとおりにしなければならないよ。そうパパは言った。両手は、常に警官から見えるところに。いきなり動いてはいけない。向こうが質問したとき以外、話しかけてもいけない」。

#25

こうしたエピソードを主人公が思い出すような出来事というか事件が小説の中で起きるのですが、その事件というのは次のとおりです。

一六歳になったスターは、ひょんなことで幼なじみの男友達のカイルが運転する車で家に送ってもらうことになります。しかし、その車の後部ライトが消えていたため、警官に車を止められるのです。警官は止めた車中には黒人だけが乗っているのを見ています。カイルは警官の要求を無視して、つまりライセンスを見せろとかいろいろ言ってくるのですが、「僕

がいったい何をしたんだ？」と文句を言います。テールライトが消えていることに気付いていないので、いろいろ言うわけです。結局、手を上げて車から出るよう促されます。渋々、カリルは車の外に出るのですが、怯えているスターを見て心配して、再び車のドアを開けて「大丈夫かい？」と気遣いの言葉を掛けます。そのときに警官はカリルに向けて発砲してしまうのです。

こういうエピソードを聞くと問題になるのは、この警官の行動がどれくらい正当性があるのか、どれくらい合理的な判断に基づいて行ったのかということです。この発砲まで至る警官の心的プロセスを、ちょっと不自然な形ですが、簡単に大枠だけ示した上で、どこを評価すべきかということを考えたいのです。

#26

まず車の外に立っているのが警官です。そして車の中を見て、こういう視覚経験を持ちます。この視覚経験に基づいて、車の中の黒人が不審な行動を取っている、不自然な動きをしていると。この信念からさらに、自分に危害を加えようとしているのではないか、非常に攻撃的だという信念をもちます。そこから「正当防衛のために発砲すべきだ」、その前にいろいろ先ほどお話しした一連の流れがあつて、こういう信念ないし判断を抱き、警官は実際に発砲してしまいます。

#27

われわれはどこから合理性のようなものを判断すべきなのでしょう。か。(A)一つ目は「車の中の黒人が挙動不審な行動を取っている」という信念から「自分に危害を加えようとしている」という信念へと移行するところです。(B)もう一つは「自分に危害を加えようとしている」

という信念から「正当防衛のために発砲すべきだ」という判断へと移行する部分です。(C)最後は、そもそものですが、「車の中の黒人が挙動不審な行動を取っている」という信念を抱く部分です。

(A)と(B)に関してはいろいろなさまざまな状況、いろいろな証拠によって、その警官の合理的な評価は変わらると思うのです。

#28

ただし、(C)に関してはちょっと事情が異なるのです。今、僕が問題にしたいのはこの部分になります。

#29

先ほど皆さんと一緒に確認して、皆さんもご納得いただけたというか、当たり前だと思っただけなのですが、あの常識的な見解に基づいてこの部分を評価しようとする、まず経験に関しては、警官は、経験の内容は「車中にいる黒人男性が挙動不審であるように見える」というものです。常識的な見解の一部をちょっと思い出してみましよう。かくかくしかじかのように見えるのであれば、かくかくしかじかであると思えることは合理的に根拠づけられている、しっかりとした理由があると言っている。そうすると、この事件においては当然、この場合、車の中にいる黒人が挙動不審であると信じることは合理的な仕方では根拠づけられています。そういう理由を持っていますと言ってもいいとなってしまう。ただし、こうするとちょっと良くない帰結が出てきてしまいます。

30

結局どういう帰結になるかと言いますと、知覚経験は人種差別的行為の端緒となるような信念を、常に合理的に根拠づけてしまうようになってしまおうということです。先ほど小手川先生がおっしゃったような、黒人男性とすれ違う白人女性のと きなどもそうです。ある意味で常識的な見解は、そう見えているのであれば仕方がないということを擁護してしまおうのです。

今のケースで考えても、過程(C)によって生じるような知覚経験から直接抱いた信念に関しては、いずれの条件でも、いろいろな他の証拠があつたとしても、そう思ってしまうことに對しては、ちゃんとした理由があると言ってしまうことになります。これはいろいろな局面が考えられるのですが、とりわけ人種差別などいろいろな差別の温床になってしまうのではないか、倫理学的に非常にまずいのではないか、というケースを引き起します。

31

そうすると、結局、問題の所在はどこなのという、と、当然、われわれの常識的な見解が本当に正しいのかなということになるかと思ひます。

32

常識的な見解、われわれの直感の間違つてゐるのではないか。あるいはトマトのような例なら単純なので大丈夫ですが、それをすぐに一般化してしまつたわれわれに間違いがあるのだと疑ふことができるのです。人の知覚というのは非常に複雑なわけで、同じように考へてはいけないと。

では、こういう一般的な主張は取り下げるべきか。でもそれも結構、コストが高い。われ

われの知覚経験がわれわれの信念を根拠づけるといような自然な考え方を丸ごと捨てることになってしまうので、それはあまり良くないだろうと。では、この一部だけを変更するのがいいのではないかというのが一つの提案で、実際に哲学者の中にはそういう意見をしている人がいます。

#33

今回紹介するのはシーゲル (Siegel) という人の解決策です。そこでは、知覚経験はそれ自体では合理性の評価対象ではない、という二番目の常識的な見解の主張を退けて、それ自体、合理性の評価対象となると考えればいいとされます。というのも知覚経験が偏見や希望的観測といった合理的ではない信念や欲求によってハイジャックされるという想定を与えるからです。もしそういうことが可能であるなら、その経験の合理性も格下げされるでしょうと。そういう経験に基づいて抱いた信念は合理的ではありません。

そのためにハイジャック経験が起きなければいけないので、その種の経験が、あるということを書かなければいけません。これを説明するものとして認知的侵入仮説みたいなものが一つの例としてあげられます。他にもいろいろなハイジャック経験を起こすような経験、メカニズムのようなものを、彼女は哲学者ですが心理学者と一緒に考えてたりするわけです。つまり、知覚経験の内容は他の認知的状態（欲求・信念・感情）などによって影響を直接被ると。

#34

これは一部の認知科学の見解と相反するところがあって、いろいろ問題があるのですが、もしこれが正しかったとすると、常識的な見解をマイナーチェンジするだけで済むのですよ

う。知覚経験は信念を合理的な仕方で根拠づけるということは認めます。とはいえ、但し書きが付きまします。つまり、特別な理由がない限り、かくかくしかじかであるように見えるならば、かくかくしかじかであると信じることは合理的根拠を持つている、ということです。

それゆえ、知覚経験それ自体も合理性の評価対象であり得る、そういうケースがあるということを考えてもいいのです。

#35

ハイジャック経験とは、結局、知覚経験が形成する段階で、「こういう車に乗っている黒人はヤクの売人ばかり」「こういう姿の黒人は何をやらかすか分からない」とか、そういう偏見が直接、知覚経験に作用している経験のことです。これを認めれば、その経験に基づいて「車の中の黒人は挙動不審だ」という信念を抱く場合は、この信念は合理的な根拠を持っているとは言えないというふうに言うことができます。

#36
#37

そうすると、結局、ハイジャック経験が本当にあるのか、こういう解決策が一応、一つ提示されているのですが、あるかどうかというのが定かではないのです。それを証拠立てるような社会心理学の実験データなども引用したりするのですが、その正当性は議論の余地があります。

また、仮にこういうハイジャック経験があったとして、人の知覚の場合、どの程度の範囲で、どのような要因で（というのは）、今日の話を聞いていても、文化や性差や個人も含めていろいろな要因があると考えられます。そういうものを明らかにする必要があります。これは経験的探求、しかも顔身体学で行われているような総合的な研究が恐らく必要になっ

て、先ほどの具体的な倫理的な問題を評価する上でも、こういうトランスカルチャー状況下における顔身体学によって検証されるべき問題なのではないかと思っております。

ご清聴ありがとうございます。

(床呂) はい、小手川先生、國領先生、ありがとうございました。

今のご発表は顔身体に関する現象学の立場から始まって、最終的には、例えば人種差別といったようなアクチュアルな問題やトランスカルチャー状況という、まさに今回の科研のわれわれのプロジェクト全体に関わる問題提起をしていたのではないかと思います。

プログラムでは一〇分休憩ということですが、先ほど既に五分休憩をしていますので、いったん休憩は取りたいのですが、五分間でよろしいですか。若干、時間が押しているということもありますので、よろしいですか。ちょっと短めで恐縮ですが、五時一二分というふうにこちらの時計であります。

Ⅲ 総合討議

(床呂) それでは予定の再開時間となりましたので、ご着席をお願いいたします。よろしいでしょうか。

それではプログラムのには最後は質疑応答、ディスカッションの時間とさせていただければと思います。

それで、実は冒頭にも申し上げましたように、昨日、実は領域会議ということで科研のメンバー相互の専門的なディスカッション、相互の質疑応答はかなり時間を取ってやっております。本日はむしろ、冒頭に申し上げましたように、趣旨としてはアウトリーチ的な、外部の方への成果公開ということを第一の目的として掲げていますので、質疑応答の進め方は差し支えなければ、最初は申し訳ないのですが、顔科研の関係者の方に関してはちよつと自制をしていただいて、科研のメンバー以外の方からのご質問なりコメントを最初は少なくとも優先させていただきます。もちろん、それで出なければ関係者の方もしゃべっていただいて結構なのですが、そういう順番で進めさせていただくということでもよろしいでしょうか。

今回もいろいろディシプリンや方法論も違う、それぞれのご発表がありましたので、当然、そういう個別の文壇者の方へのご質問やコメントもお受けいたしますけれども、それ以外の皆さんの中には、われわれの新たなプロジェクト「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築」全体に関する何かご質問なりコメントなりもあるうかと思えます。せっかく領域代表の山口先生もいらっしゃっているということもありますので、全体に関わる何かご質問なりコメントも喜んで歓迎いたします。

というわけで、何でも結構ですので、まずはこの略称「顔科研」以外のメンバー以外の方、

関係者以外の方からどなたか質問なりコメントなりありましたらいかがでしょうか。卓上にマイクがあるのですが、音量が小さくて録音でクリアに音が拾えないことが分かりまして、係の者がワイヤレスマイクを渡しますので、それをお願いします。差し支えなければ、お名前だけでも言っていただけあればありがたいです。今日はありがたいのですが、割と若手の方もたくさんいらしていただいています、いかがでしょうか。

(フロア1) すみません。「似顔絵毒絵スペシャル」TVチャンピオンの斎藤です。今は尚美学園大学で、非常勤でデザイン、似顔絵等を教えています。

最初に、山口先生の、自閉症の子どもが鮮明に見えるという話がありました。それを考えたのですが、鮮明に見えてしまうから、自閉症になってしまうということはないですか。普通に映像が鮮明に見えると、それだけ情報量が多くなるので、多分、幼児の脳の処理能力では追いつかなくて、情報を閉ざしてしまつて自閉症になってしまうのかなと思ったのですが、どうなのでしょう。

(山口) はい。ご質問ありがとうございます。時間がなかったのでかなり端折ってお話してしまつたのですが、あれはもともとは自閉症のお兄さん・お姉さんを持つ、下の子の六カ月時点の視力で、それが全ての原因になるとは考えられないのですが。恐らく自閉症には感覚の過敏がある可能性があり、それが視覚ではなくて聴覚の場合もあり、視覚の場合もあり、それらが感覚としてたくさん入り過ぎて、オーバーフローを起こしているという可能性もあるかと思えます。

特に乳児のとき、すごく視力が悪いことにどういう意味があるかというと、それも時間がなくて説明しきれなかったのですが、ぼんやりとした映像で顔を見ると、何となく細かいところに注目できないので、大雑把に印象を得るしかないのです。そうすると、意外にそういう粗い絵でも、表情というのは割と比較的読み取りやすくなります。私たちが顔を何となく

大雑把に読み取る、多分、似顔絵などを描いていらっしゃる方は、個別に獲得されたコツとして、全体的な配置から、その人に似せて見せるというコツがあるかと思うのですが、そういうコツを頭の中で学習する良いきっかけになると思うのです。

それが自閉症で失なわれている原因の一つ、全ての自閉症が、それが原因ではないのですが、そういう可能性があるというお話です。

(フロア1) はい、ありがとうございます。

(山口) ありがとうございます。

(床呂) よろしいでしょうか。

他の方、いかがでしょうか。そちらの方。

(フロア2) 今日はありがとうございます。中京大学心理学部の高橋さんに質問なのですが、アフリカにいらっしゃる村の子どもたちに笑顔の顔と泣き顔を描いてくださいとおっしゃったときに、笑顔というのは、何と言ったらいいのでしょうか、どんなふうにお伝えしたのですか。

(高橋) あれは子どもではなくて、成人の方にほとんどやっています。伝え方は非常に難しく、ただスワヒリ語で「笑っている顔」というのを、現地のアシスタントに説明して、アシスタントから現地の人に、あの課題をやっていただきました。「笑っている顔」という感じですね。

(フロア2) 「笑っている顔」というのは、どの国にもどの地域にも共通してある言葉なのですか。

(高橋) 「笑顔」に対応する言葉は、正直難しい部分があります。「笑っている」というのは多分、言葉はあって、もちろんない文化もあるかもしれませんが、少なくともあの地域には「笑っている」と。ただ、「笑う」ということの多義的な部分があって、いろいろな笑い方が

あります。ですから、「笑っている」と言っても、「どういうふうに笑っているのか」「どういう笑いを言っているのだ」という質問を受けることはあります。

(フロア2) 分かりました。ありがとうございます。

(床島) はい、ありがとうございます。

他の方、いかがでしょうか。

(フロア3) 大阪大学歯学部の方(やしろ)と申します。

われわれ、医療の立場から、顔に先天異常のある患者さんをたくさん手術して、医療現場の方から思うことがあります、もともと先天異常がある患者さんほど、そういう手術を受けても、自分の中で新しい顔を受け入れられない。何と言いますか、咀嚼できないと言いますか、自分の顔の表象というものが、生まれてからずっと長期の運動感覚経験が影響しているのかもしれませんが、認知的にかなり改善した顔を再認知するのは困難であるような気がしているのです。そういう医療の立場からの、診断学的な何か示唆を与えるような、プロジェクトからのご示唆があれば、ちょっと質問として伺いしたいのですが。

(床島) どうでしょうか。どなたがレスポンスをされますか。山口先生、されますか。それとも。

(山口) まず、私から言つて、河野先生もいいですか。

大変貴重なお話だと思います。ある意味、そういうことも取り入れて検討していきたいなと思つているのです。いわゆる顔身体の中で、なぜ顔が身体から独立しているかというところ、つまり身体は顔の中にあるので、身体学だけでいいはずなのですが、顔・身体となつているのは、やはり顔というのは、私自身というところもあるわけです。最終的には顔、化粧をしたりいろいろ変えることによって、何となく自分自身が変わったような気がする。、それも含めてトランスカルチャーという話をしましたが、やはり顔を変えらるということは、自分自

身を変えるということとイコールで、自分自身を変えることも非常になかなか厳しい、それと同期することがあるかと思います。それがやはり身体の中での顔の特別性であり、そういうことも考察として深めていきたいと思っておりますが。

河野先生、きつと何かお考えがあるかと思ひます。

(河野) 非常に面白い例で、私も別にそういう専門家ではないのですが、顔に障害があると、表情が出ないというようなことですか。メビウス症候群がその例だと思ひますが……。

(フロア3) 社会的には差別ではないですが、「可視的な変形」という言い方で呼ばれて、Visible difference すなわちVDというのですが、ずっと長期の、生まれてからずっとの変形ですから、生まれ持った顔を変えることは、われわれ医療の立場からすると、非常に心理学的にも感情管理的にも難しいと。

(河野) あまり使いたくない、好きな言葉ではないのですがその問題は「障害受容」という大きな範疇に入る現象なのだろうと思ひます。顔というのは、能面を初めて付けて舞った人の例をあげてみたいと思ひます。能面をご存じですか、すごく目の部分が狭いのです。仮面をかぶって舞ったときには、自分が裸にされたような感じがするという経験を語る人が多いのです。仮面をかぶることによって、逆に自分があらわになっていくような経験をして、それが非常に恥ずかしい、仮面をすることが非常に恥ずかしいというのです。それはどうしてかという、自分がどう見られているか分からない状態で、人に見られるというのは、裸にされた感じがするというのです。

表情に関して、ずっと人と平均的なインタラクションをしてこなかった人たちに關しては、今、自分の持つてゐる像と食ひ違ひが生じていて、非常に今の自分のアイデンティティを揺るがすようなことになっているのだろうと私は思ひます。統合失調症で表情が出なくなつてしまつた方が、ものすごいおてもやんのような強い化粧をすることがあります。心理

学の先生は「ご存じだと思いますが、どうしてあんな化粧をするのか」という分析の発表を、私は別に臨床医ではないのですが、発表したことがあって、そのときもやはり自分の思っている表情の出なさ、相手の評価のずれというのが、自分のアイデンティティを非常に揺るがして、恐怖心を与えるというようなことなのだろうと思います。

非常に興味深い例で、先ほど小手川さんたちが話された、自分が見る存在であることと、見られる存在であること、この循環がうまく回らない状態というのは、今、そうした患者さんにおいて、すぐはつきり出ているのですが、多かれ少なかれ私たちも感じることであって、それがものすごい人格を揺るがすような大きなときになったときに、病理として出てくるものです。大きな分類で言うと、先ほど言った障害受容というようなことになると思いますが、私たちが小さい形で、誰もが経験すること、非常に拡大されたような経験なのではないかと思います。それをしっかりと個々のケースに沿って、私もそういう分析をしたいなという気持ちを持っています。もしよろしかったら、いろいろ教えてください。

(床呂) ありがとうございます。他の方、いかがでしょうか。よろしいですか。

もしいらっしやなければ、関係者の方も含めてということで戻させていただければと思います。実は昨日の領域会議では、ご発言をまだ頂いておりませんでした班友の先生、北山晴一先生と村田純一先生がご出席、ご参加いただいておりますので、もしよろしければコメントなり、何か頂ければと思いますけれども、いかがでしょうか。

(北山) 立教大学の北山と申します。この集まりは今回で三回目になるのですが、毎回いろいろな角度から新しい発見をさせていただいて、本当に本当に感謝しております。

私自身はこれまでいろいろなことをやってきたので、どれが自分の専門か、なかなか言いくいのですが、ここでは身体社会学という立場からの発言と考えていただければけっこうです。その前に、今回の新領域とは何か、新領域を立ち上げることの困難についてちょっと

だけお話させていただきます。コメントと言いますが、感想みたいなものです。

文化人類学というか、民族学の創始者の一人として知られるマルセル・モースという人が、研究の宝物というのは境界領域に埋まっているということを言っております。皆さんよくご存じの言葉だと思うのですが、まさしくそれが今回の新領域だと思います。ただ、新しい領域を立ち上げるというのは、ものすごくプレッシャーが強いことです。どういうプレッシャーかと言うと、本当に世俗的な意味でのプレッシャーなのです。境界領域というのは、いろいろな周囲にある、いわゆる確立された学問分野から、ものすごい圧力を受ける宿命にあります。

個人的な経験ですが、数年前に私は化粧学という分野をつくりたいと思ひまして、立教大学の定年の後に、大阪樟蔭女子大学というところに転職しました。そこで化粧に関する大学院をつくりうと思ひて、いろいろ努力したのですが、化粧学という分野はつくれないということが分かりました。なぜかという、文科省内にそれを審査する専門委員会が立ち上げられないから、そういう分野は認められないということのようでした。それで、基礎となる学科が、被服学だということを経由にして化粧・ファッション学という名称で申請しました。それなら、家政学の専門家がいるというわけで、審査を受けて、化粧ファッション学専攻という大学院ができました。このような感じで、新しい分野・領域をつくるということは、ものすごく難しいです。けれども、それだけに非常に面白い発見がいろいろなところに埋まっているということが、今回こういう新領域の立ち上げに関して最初に思ったことです。

それから、新領域ということですが、新領域というのは境界線上にあるという話をしました。境界線上といえ、みなさんご存じのところでは顔であり身体であり、またそれらを含めたものとしての皮膚が思い浮かびます。そこが新しい学問の分野としてできていくという

ことは、非常に大事な点で、そこに新しい、いろいろな発見があると期待できるわけです。しかしながら期待と同時にもう一つ考えなければいけない大切な事柄があります。境界線上の事柄を扱うことは皮膚のことを扱うときと同様に細心の注意を要するのだということですから。境界Ⅱ皮膚には非常にフラジャイルな、危ういところがあるのです。その危うさについての、何と言いますか、私たちが配慮を欠いた形で研究を進めるということは、ものすごく危険だだと思います。

幸い、今日の発表、昨日の領域会議の発表を聞いた限りでは、そういう懸念は恐らくないだろうな、少なくともここで研究を一緒にやっている人たちについては、ないかなという安堵感と同時に、やはりそのことについての配慮は、これから常にかけていなければいけないという思いを持ちました。

それで、今日伺ったお話についてですが、特に田中みわ子さんのお話について、私は非常に関心を持ちました。私は脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会というところの発起人で役員もしておりますが、脳に外傷、あるいは脳梗塞などいろいろな形で損傷を受けた人たちが、どのように社会とコミットしていけるのか、さらには、ケアする者もケアされる者も区別なく両方を含めた形でのケアリングを可能にする社会、ケアリングコミュニティはいかにして可能になるか、そんなことを議論しています。

そこで最初に出てきた問題が、リハビリテーションとは何なのかという問いでした。リハビリテーションというのは、元の状態に戻すということです。では、元の状態に戻すとはどういうことなのか、元の状態とは何だろう。今日のお話に出ましたが、完全なる美、完結した美というものについて、やはり再考せざるを得なくなります。いわゆる普通の状態というのは何なのか、そこに戻すのがリハビリだとすると、障害は普通ではないのかという設問に戻ってくるわけです。

そのとき様々の価値判断が介入してくるのはよいのですが、これは私たちが日常的に経験することですが、価値判断が入るときには、必ず権力関係が入ってくる。しばしば権力闘争的な状況が発生する。多くの場合、世の中、マジョリテイの価値観でつくられていることに直面するわけです。

それに対する、ここからもう一つの私のコメントなのですが、マジョリテイに対する異議申し立てという形でもって、さまざまな行動が試みられます。先ほどのお話で言うと、個人の悲劇モデルから、アフーマティブ・アクション的な形でのモデルという意味、アフーマティブ・モデルという言い方をされていたと思うのですが、そのときの異議申し立ての対象は、常にマジョリテイというような、ある種の敵が想定されて、それに対する異議申し立てなのです。それが契機となって、さまざまな芸術活動が行われてきたという歴史的現実もあります。でも、それは常に異議申し立てでなければならないのかという問いも立てる必要があります。どの時点まで異議申し立てという形でやっていけるのか、それを突き抜けた形での可能性は考えられないのかということを考えさせられました。

私が比較的懇意にしている金満里さんという人がいるのですが、劇団「態変」という、「態変」というのは態度の「態」と「変わる」ということなのですが、ひっくり返して「変態」ということなのですが、そういう劇団で活動をしているパフォーマンスアーティストです。彼女はそれこそ自らの障害のある身体をさらして舞台をやっています。みんなが顔を背けるような、そういう身体を駆使して舞台上でパフォーマンスをやるわけなのです。恐らく、アフーマティブ・モデルとしての芸術、美ということに対して、彼女はある時点まではそうだったと言うかもしれませんが、今の時点だと、そういう形でもって常に異議申し立てのレベルでしか自分の身体パフォーマンスが評価されないということに対して、恐らく強い違和感を持っているのではないかと思います。では、その先どこに向かうべきなのかということ

を、先ほどの田中さんのお話を聞きながら痛切に思ったわけです。長くなりましたので、この辺で閉じさせていただきます。

(床呂) はい、全体の趣意にも関わってくるような大変貴重なお話、コメントをありがとうございます。

それでは村田先生、いかがでしょうか。

(村田) はい、立正大学の村田といいます。哲学を専門にしているのですが、この顔身体関係の会議には今日、初めて来ましたので、あまりにもたくさんの情報を得て、今、頭がパンクしそうな感じです。

新領域ということについては、私は数年前に文科省の審査委員になっていて、そのときに感じたのは、いろいろ面白そうな提案が出てくるのですが、少なくとも哲学あるいは思想関係のようなものが入っているものは、ほとんどありませんでした。それが今回、哲学を一つの柱にして、こういう新しい領域で展開しようという試みが採択されたというのは、何って非常に、その点では喜びました。哲学も、学問の中で本来なら領域横断的なところで一番役に立つはずのものだと思いますので、今後ぜひこういうことを続けて、成果を上げていただければと思います。

コメントというか質問も、せっかくですから少しだけさせていただきます。まず、顔身体というときに、なぜ身体だけでなく、顔を強調しているのかということを、私も漠然とずっと疑問に思っていたのですが、先ほどのお話しで既に答えが出されたようです。つまり、身体という言葉は、表情と身体、表情と身振りといった仕方、他者認知や他者理解のときなどに、よく使われるので、顔というのはある意味で既に入っているわけです。ですが、わざわざ顔ということに焦点を当てて考えようとすると、先ほど山口先生は、私というような、自己の問題に帰ってくるということを、非常にはつきりおっしゃられた。そうするとそこか

らすごく多くのことが広がって見えてくると思います。顔というものに焦点を当てたところの特徴を、ぜひ今後いろいろな側面から考えていただければと思います。

先ほど、デイスアビリティ・アートの紹介のなかで、目が見えない方が描かれた絵というのが田中先生のところで紹介されていました。その絵を見て、目の見えない人の世界の中の顔というのが、一体どんな意味を持っているのか、あるいはどういう印象を持っているのか。これについて、既にグループ中で議論されたことがあったのであれば、何か教えていただければありがたいなと考えました。あの絵にも、顔ははつきりなかったように思いますので、そのような視覚世界でない世界の中で、顔というものがどういう意味を持ち得るのかということ、どう考えたらいいのかというのは、一つ考えたいなと思ったことです。

もう一つは、最後に紹介された知覚の倫理学と言いますか、現象学の立場からの問題提起に関するものです。紹介では信念と知覚ということだけで問題設定がなされていましたが、特に表情や身体の知覚の場合は非常にはつきりしているように、表情というのは情動の表現を不可分を含んでいるわけです。それは同時に、情動の知覚でもあるわけです。

そういう点から言えば、知覚というまず中立的な認知の働きがあつて、それに信念のバイアスがかかる・かからないというよりは、その知覚の中に既に情動的なものが入っていて、取り上げられた事例に則して言うなら、警官が黒人を見たときに、警官の方も恐ろしいというような、あるいは警戒感のような情動的な反応を起こしたと思うのです。そのような側面を考えると、先ほどのように、単にビリーフ、信念の問題として考えるだけではなく、情動も含めた社会との関係のようなことを考えながら、表情・身体論を展開していただければと思います。

(床邑) はい、どうもありがとうございます。全体に関する貴重なコメントと、個別の発表に関する具体的なご質問が、二点ほど出されたかと思っています。まだ時間がありますので、よ

ろしければ田中先生と小手川先生、國領先生にそれぞれ、もし可能であればレスポンスいただければありがたいのですが。

まずは田中さん、大丈夫ですか。

(田中) 北山先生、村田先生、非常に貴重なコメントをありがとうございます。

(床呂) ちょっと距離が難しくすみません。

(田中) 本場に貴重なコメントと質問をありがとうございます。目の見えない人にとつての顔は、恐らく私ではなくて、河野哲也先生が一番お答えできるのではないかと思うのですが、結局、私も分からないのです。顔とは何かということを問い掛けている事象だということと、あと、直接的な問いに対するお答えではないのですが、倉本智明さんという方が、「盲人男性は「美人」に欲情するか」という論文を出されています。顔とは何なのか、目の見えない人にとつての顔とは何なのかというお答えにはならないのですが。でも、表情や感情、あとは触覚や別のかたちの視覚で、目で見えるものではないものとしての顔があるようにも感じますが、それはイメージなのか、そもそも何なのかという問いは、私自身にはすごく大きな課題のように思います。今はこういう形でしかお答えできないのですが、本当にありがとうございます。

(床呂) よろしいですか。ありがとうございます。

一瞬、河野先生の無茶振りもありましたが、ちょっと後にもし時間があればということですが、先に小手川先生、國領先生からレスポンスが可能であればお願いできませんでしょうか。

(國領) コメントと質問をありがとうございます。

おっしゃるとおり、今日は問題をできる限りコンパクトにしたかったので、信念と欲求との関係のようなものだけを取り入れたのですが、ハイジャック経験のようなものが仮にあるとして、そういうものはかなり密接に関わっているのは、情動・感情と言われているような

もので、感情はある種、世界に対する態度、われわれの態度の仕方なので、そういうものも視覚経験をかなり左右しているだろう、かなりバイアスをかけるものだと考えています。

実際に今日の事例では、例えば黒人に対する感情や黒人に対する排他的な知識などによってビックアップされて、経験の質がかなり変わってしまうと思うのです。そういう効果は、必ずあると思います。おっしゃるとおり、そういう複合的な観点で、とりわけ顔が持つ知覚経験のようなものを考える必要があります。

今日、渡邊先生のご発表を聞いて思ったのは、身体の動きのようなものも、かなりすごく影響しているのだなと。カリルという黒人の少年が車の中でいろいろな仕草を恐らくしていると思うのですが、小説だと分からないのですが、そういう仕草が警官の知覚経験に影響を与えます。その仕草のどういう特徴をビックアップしているかというのは、かなり他の認知的な状態によって、影響を受けているのではないかなと思います。

(床呂) はい、ありがとうございます。

よろしいですか。他の方、いかがでしょうか。あと七分少々ございますけれども。もしなければ、河野先生から何か話したいオーラが伝わってくるのですけれども。先ほどの無茶ぶりもありましたし（笑）。

(河野) まず國領さんがお話しされたことなのですが、やはり渡邊先生のご研究がすごく重要だと思うのです。われわれは気付かないうちに、一種の同調行動というか、何というか、感じていないようなレベルでのシンパシーのようなものがあって、ミラーニューロンの働きといったものがあるのかもしれない。私たちが「怒っている」「かーっときた」など、そのような意識に上るレベルの感情が生じる前で、何かの形で他者とインタラクションが起きているというようなことがあって、その意味で知覚と言われているのは、すごく重層的だと思っています。そこを考えなければいけないのではないかなと思います。そこに私たちの共

同研究することの意味があるのではないかと思います。

それから田中さんの話ですが、顔は何なのかということですが、声を聞くと大体、その人の胸から頭に至る感じというのは、どこかつかめる気がするのです。声を聞くと、体の中で音がどういうふうに響いていて、どんな感じの体内なのかというのは、声自体の持っている質で体の内部のあり方が、ある程度分かるといえるか、そのような気がしてならないのです。

顔の形というのもそのようなもので、途中から失明した人と、最初から見えない方とは随分、意味合いが違うので、最初から見えない方を考えたときに、ただ彼らのつくっている彫刻などを見ると、やはり晴眼者とは違います。他方で感覚というのは多様相的で、どの感覚をとっても多様相的で、一つのものが何かいろいろなものを引きずって、表しているところがあるような気がするのです。

そうすると、顔というのも、顔から発信する何かというのは、視覚的な情報だけではないと思いますが、かといって晴眼者と最初から全く見えない人が同じかというと、違うのではないかと思うので、その違いは、これから調べていく必要があるのではないかと思っています。

(床呂) はい、どうもありがとうございました。

徐々に残り時間が少なくなってきた、あと手短にお一人、一つクエスチョン・アンド・レスポンスくらいは可能かもしれませんいかがでしょうか。よろしいですか。

もしなければ、最後に節目のお言葉と言いますか、代表の山口先生から一言頂ければと思います。よろしいでしょうか。

(山口) 昨日から集まられた方、今日参加していただいた方、どうもありがとうございます。特に今日、公開シンポジウムのお話を聞いてきてまして、実は一・二・三回目ですね。二回目で、文化人類学班と心理学班のコラボレーションの道筋が見えてきたところがあつたので

すが、この三回目で、哲学も含めた三つの道筋というか、それぞれ一緒にやっていくような、そういう感触が得られた、非常に貴重な会であったのではないかと思います。それぞれ持ち帰り、この領域をやっていきたいと思うことと、改めて顔身体の中で顔が独立しているというこの意味について、もともとはたまたま最初に顔があつて、身体があつて、何となくくっつけていたのですが、顔が独立しているということは、実は意味があるということを改めて思い至りまして、ぜひ、そのことについても検討していきたいと思います。

ご質問にありました、目の見えない人の顔について、私なりの話をさせていただきますと、顔ということで、今日はどちらかというと視覚中心の話が多かったのですが、話をすると、しゃべるということで、自分の筋肉の動きも感じているわけです。この動きや筋肉の動きもあること、そして感覚、五感ですね。あらゆる感覚が顔から入ってきています。顔中心のところであれば、嗅覚も味覚も顔から入る、そして聴覚も顔の周りにあるというところで、様々なメディアが集まっているというところで、それは特殊な意味を持ちます。

その特殊な意味を持つところとともに、私たち人間というのは、社会の中で顔をさらすことによつて、顔というのは、さらに特殊になっていったのかなということをひしひしと考え、そういう考えを顔身体学カフェで、いろいろな人たちと共有していったり、また、この場で哲学と文化人類学と心理学の中で深めていけたらと思います。もちろん、顔だけではなくて、身体も重要な局面はたくさんあります。動きにしてみると、顔の次に手です。私たちは、この手は自分の手というふうに、認識しているようなところがあるかと思っています。そういう顔と身体、もう一度深く考え直しながら考察して、またさらに深めていけたらと思います。

今回はお集まりいただき、どうもありがとうございました。(終)

顔・身体学とは

「顔・身体学」領域では、顔と身体表現の意識化されない点を意識化することにより、文化の中で閉じたコミュニケーションを理解し、異文化が相互に行き交うトランスカルチャー状況下における他者の受容を導くことを目標とする。顔や身体は目前に物理的に存在する対象であるため、多様な分野の共通の研究対象となりうる。現実の顔や身体表現とその認識様式を実証的に検討し、文化的多様性とその背景要因を調査する。そこからメカニズムの解明や社会組織上の再考が可能となり、顔と身体表現から時代や社会を考察することもできる。人文社会を中心としたアプローチにより、トランスカルチャー状況下における顔身体学を考えていきたい。

トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築（第二回）

科学研究費助成事業「新学術領域研究（研究領域提案型）」

『トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築―多文化をつなぐ顔と身体表現―』

二〇一七年度 公開シンポジウム

共催 A A 研基幹研究

「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の可能性の探求
―人類学におけるミクロマクロ系の連関2―」

編 集…床呂郁哉

編集補佐…吉田優貴

発 行…東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

〒一八三―八五三四 東京都府中市朝日町三―一一―

TEL ○四二―三三〇―五六〇〇

FAX ○四二―三三〇―五六一〇

ホームページ <http://kao-shintai.jp/index.html>

発 行…二〇一八年三月二〇日

表紙デザイン…吉田優貴

印刷・製本…株式会社ワードオン

〒三三五―〇〇〇四 埼玉県蕨市中央七―五六―三

